

日蓮大聖人御書全集

しもやまごししょうそく

下山御消息

新版
272
〜
301

しもやまごしようにそく

下山御消息

けんじ

ねん

がつ

さい

しもやまみつもと

建治3年('77)

6月

56歳

下山光基

れいじ

「例時においては、もつとも阿弥陀経を読まるべきか」等

うんぬん

云々。

おお

そうら

いぜん

しんぷ

だいかん

このことは、仰せ候わぬ已前より、親父の代官といい、

わたくし

はか

もう

し

ごねん

あいだ

たいてん

れいじ

私の計らいと申し、この四・五年が間は退転なく例時に

あみだきよう

よ

たてまつ

そうら

こぞ

はる

すえなつ

はじ

は阿弥陀経を読み奉り候いしが、去年の春の末夏の始め

あみだきよう

とど

いつこう

ほけきよう

うち

じが

げどくじゆ

より、阿弥陀経を止めて、一向に法華経の内、自我偈読誦し

そうろう

おな

いちぶ

よ

たてまつ

励

そうろう

候。また同じくは一部を読み奉らんとはげみ候。こ

れまたひとえに現当の御祈禱のためなり。

あみだきよう ねんぶつ とど そうろう

ひごろ

ただし、阿弥陀経・念仏を止めて候ことは、この日比、

にほんこく き たも にちれんしょうにん い ぶんえいじゅういちねん

日本国に聞こえさせ給う日蓮聖人、去ぬる文永十一年の

なつ ころ おな こうしゅういいのみまき はきいのごう うち みのお みね

夏の比、同じき甲州飯野御牧の波木井郷の内、身延の嶺と

もう しんざん ごいんきよ たま そうら ひとびとごほうもん

申す深山に御隠居せさせ給い候えば、さるべき人々御法門

うけたまわ よしそうら

ごせいし い

承るべきの由候えども、御制止ありて入れられず。お

こうえん

叶

そうら

ひとげんざん

ぼろけの強縁ならではかないがたく候いしに、ある人見参

そうろう もう そうら

そうら

料

の候と申し候いしかば、信じまいらせ候わんりように

まい そうら よう みそうら

かんじよ し

は参り候わず、ものの様をも見候わんために、閑所より忍

まい　ごあんじち　うし　かく　ひとびと　ごふしん
んで参り、御庵室の後ろに隠れ、人々の御不審について、

あらあら御法門とかせ給い候いき。
ごほうもん説　たま　そうら

ほけきよう　だいにちきよう　けごん　はんによ　じんみつ　りようが　あみだきようとう
法華経と大日経・華嚴・般若・深密・楞伽・阿弥陀経等の

きようぎよう　しょうれつ　せんじんとう　さき　と　たま　うけたまわ　そうら
経々の勝劣・浅深等を先として説き給いしを承り候

ほけきよう　あみだきようとう　しょうれつ　いちじゅうにじゅう
えば、法華経と阿弥陀経等の勝劣は、一重二重のみなら

てんちうんदै　そうら　たと　たいしやく　えんこう　ほうおう
ず、天地雲泥に候いけり。譬えば、帝釈と猿猴と、鳳凰と

かささぎ　おおやま　みじん　にちがつ　ほたるびとう　こうげ　しょうれつ
烏鵲と、大山と微塵と、日月と螢炬等の高下・勝劣なり。

かれがれ　きようもん　ほけきよう　ひ　あ　比　たま
彼々の经文と法華経とを引き合わせて、たくらべさせ給い

ぐにん　わきま　はくはく　せきせき
しかば、愚人も弁えつべし。白々なり、赤々なり。されば、

ほうもん だいたいひと

し

はじ

驚

この法門は大体人も知れり。始めておどろくべきにあらず。

ぶつぼう

しゆぎよう

ほう

かなら

きようぎよう

だいしよう

ごんじつ

また、仏法を修行する法は、必ず経々の大小・権実・

けんみつ

わきま

うえ

とき

し

き

かんが

もう

顕密を弁うべき上、よくよく時を知り機を鑑みて申すべ

とうせいにほんこく

ひと

あ 弥陀 きよう

きことなり。しかるに、当世日本国は、人ごとに、阿みだ経

みだ

みようごうとう

ほん

ほけきよう

こっしよ

たてまつ

ならびに弥陀の名号等を本として、法華経を忽諸し奉る。

せけん

ちしや

あお

ひとびと

われ

われ

じき

し

じき

世間に智者と仰がる人々、我も我も時機を知れり時機を

し

ぞん

そうら

しょうぜん

だいぜん

う

知れりと存ぜられげに候えども、小善をもつて大善を打

たてまつ

ごんきよう

じつきよう

うしな

失

しょうぜんかえ

ち奉り、権経をもつて実経を失うとがは、小善還つ

だいあく

くすりへん

どく

しんぞくかえ

おんてき

な

て大悪となる、薬変じて毒となる、親族還つて怨敵と成る

がごとし。なんじ しだい難治の次第なり。

また、仏法には賢げなるようなる人なれども、時により機き

により国により先後の弘通によることを弁えざれば、身心しんしん

を苦しめて修行すれども験なきことなり。たとい一向にいっこう

小乗流布の国には大乘をば弘通することはあれども、

一向大乘の国には小乗経をあながちにいむことなり。忌

強強しいてこれを弘通すれば、国もわずらい、人も惡道まぬかれ

がたし。

また、初心の人には二法を並べて修行せしむることをしよしん ひと にほう なら しゆぎよう

許

がつし

なら

いつこうしようじよう

てら

もの

おうろ

い

ゆるさず。月氏の習いには、一向小乗の寺の者は王路を行

いつこうだいじよう

そう

そう

みち

踏

い

みず

かず、一向大乘の僧は左右の路をふむことなし。井の水、

かわ みず

おな

の

いちぼう

す

河の水、同じく飲むことなし。いかにいわんや一房に栖み

ほけきよう

しよしん

いつこうだいじよう

てら

ほとけと

なんや。されば、法華経に、初心の一向大乘の寺を仏説き

たも

ねが

だいじようきようてん

じゆじ

ないし

給うに「ただ樂つて大乘經典を受持するのみにして、乃至、

よきよう

いちげ

う

い

しyouもん

もと

余経の一偈をも受けざれ」。また云わく「また声聞を求む

びく

びくに

うばそく

うばい

しんこん

い

る比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に親近せざれ」。また云わ

もんじん

とううんぬん

しんぷ

いつこう

く「また問訊せざれ」等云々。たとい親父たれども、一向

しyouじよう

てら

じゆう

びく

びくに

いつこうだいじよう

てら

小乗の寺に住する比丘・比丘尼をば、一向大乘の寺の

しそく

らいはい

しんごん

ほう

子息これを礼拝せず親近せず。いかにいわんや、その法を

しゆぎよう

だいしようけんぎよう

てら

ごしん

ぼさつ

修行せんや。大小兼行の寺は、後心の菩薩なり。

いま

にほんこく

さいしよ

ぶつぽう

わた

そうら

ころ

だいしよう

今、日本国は、最初に仏法の渡つて候いし比は大小

ぞうぎよう

そうら

にんのうしじゆうごだいしようむてんのう

ぎよう

とう

雑行にて候いしが、人王四十五代聖武天皇の御宇に、唐の

ようしゆうりゆうこうじ

がんじんわじよう

もう

ひと

かんど

わ

ちよう

揚州竜興寺の鑑真和尚と申せし人、漢土より我が朝に

ほけきよう

てんだいしゆう

わた

たま

えんきみじゆく

思

法華経・天台宗を渡し給いてありしが、円機未熟とやおぼ

ほうもん

こしん

おき

くち

い

たま

しけん、この法門をば己心に収めて口にも出だし給わず、

だいとう

しゅうなんざん

ぶとくじ

どうせんりつし

しやうじようかい

にほんこく

大唐の終南山の豊徳寺の道宣律師の小乗戒を日本国の

さんしよ

こんりゆう

ほつけしゆう

るふ

ほうべん

三所に建立せり。これひとえに法華宗の流布すべき方便な

だいじようしゅつげん のち かた なら ぎよう

り。大乘出現の後には肩を並べて行ぜよとにはあらず。

れい じゆか ほんし こうし ろうしとう さんせい ほとけ おんつか

例せば、儒家の本師たる孔子・老子等の三聖は、仏の御使

かんど つか ないてん しょもん れいがくぶん しょにん

いとして漢土に遣わされて、内典の初門に礼楽文を諸人に

おし しかん きよう ひ い われ さんせい つか

教えたりき。止観に経を引いて云わく「我、三聖を遣わし

か したん け とううんぬん みようらくだいしい れいがくさき

て、彼の震旦を化す」等云々。妙楽大師云わく「礼楽前に

は しんどうのち ひら うんぬん ほとけ だいじよう しょもん

馳せて、真道後に啓く」と云々。仏は大乘の初門にしば

しようじようかい と たま とき過 いまし

らく小乗戒を説き給いしかども、時すぎぬれば禁めて云

ねはんぎよう い ひとあ によらい むじよう

わく、涅槃経に云わく「もし人有って如来は無常なりと言わ

ひと しただらく とううんぬん

ん。いかにぞ、この人、舌墮落せざらん」等云々。

のち にんのうだいごじゆうだいかん むてんのう ぎよう でんぎようだいし もう

その後、人王第五十代桓武天皇の御宇に、伝教大師と申

しようにんしゆつげん はじ けこん さんろん ほつそう くしゃ

せし聖人出現せり。始めには華嚴・三論・法相・俱舍・

じようじつ りつ ろくしゆう なら きわ たも だるましゆう えんदै

成実・律の六宗を習い極め給うのみならず、達磨宗の淵底

さぐ きわ たま にほんこく ぐつう

を探り究め給い、あまつさえ、いまだ日本国に弘通せざる

てんだい しんごん にしゆう たず あらわ せんじん しyouれつ しんちゆう

天台・真言の二宗をも尋ね顕して、浅深・勝劣を心中に

くきよう たま い えんりやくにじゆういちねんしyouがつじゆうくにち かんむ

究竟し給えり。去ぬる延暦二十一年正月十九日に、桓武

こうてい たかおでら みゆき たま なんとしちだいじ ちようじゃ ぜんぎ

皇帝、高雄寺に行幸なり給い、南都七大寺の長者の善議・

ごんぞうとう じゆうしにん きようだいし め あ ろくしゆう ほつけしゆう

勤操等の十四人を教大師に召し合わせて、六宗と法華宗

しyouれつ きゆうめい ろくしゆう せきがく しゆうじゆう

との勝劣を糾明せられしに、六宗の碩学、宗々ごとに、

わ しゅう いちだいしようか

よしおのおの

た もう

きよう

「我が宗は一代超過」の由各々に立て申されしかども、教

だいし いちこん ばんじやぶ お

のち こうていかさ こうせん

大師の一言に万事破れ畢わんぬ。その後、皇帝重ねて口宣す。

わけのひろよ おんつか

かんせき

しちだいじ ろくしゅう

和氣広世を御使いとして諫責せられしかば、七大寺・六宗

せきがくいちどう

しゃひよう

たてまつ

お

いちじゅうしにん

おもて

い

の碩学一同に謝表を奉り畢わんぬ。一十四人の表に云

かい がんれい

いま

のち

みようえん

ふね

の

わく「この界の含靈、今より後、ことごとく妙円の船に載

はや

ひがん

わた

う

うんぬん

きようだいしい

り、早く彼岸に済ることを得」云々。教大師云わく

にひやくごじっかい

す お

うんぬん

い

「二百五十戒たちまちに捨て畢わんぬ」云々。また云わく

しょうぞう

す

お

まつぼう

ちか

あ

「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り」。ま

い

いちじよう

いえ

もち

い

えじき

た云わく「一乗の家にはすべて用いず」。また云わく「穢食

をもつて宝器に置くことなかれ。ほうき お また云わく「仏世のぶつせ

だいらかん

かしやく こうむ

めつご しょうぶんぼうなん

大羅漢すでにこの呵責を被れり。滅後の小蚊虻何ぞこれ

したが

うんぬん

に随わざらん」云々。

わたくし せ

ほけきよう

しょうじき

これまた私の責めにはあらず。法華経には「正直に

ほうべん す

むじようどう と

うんぬん ねはんぎよう

方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」云々。涅槃経には

じゃけん

ひと

とううんぬん

じゃけん

ほうべん

もう

けごん

「邪見の人」等云々。「邪見」「方便」と申すは、華嚴・

だいにちきよう

はんにやきよう あみだきようとう

しじゅうよねん きようぎよう

す

大日経・般若経・阿弥陀経等の四十余年の経々なり。「捨

てんたいい

す

い

ぼう

てて」とは、天台云わく「廃つるなり」。また云わく「謗と

そむ

しょうじき

しよしん

ぎようじゃ

ほけきよう

しゆぎよう

は背くなり。「正直」の初心の行者の法華経を修行する

ほう かみ あ きょうぎよう しゅうじゅう なげう いっこう

法は、上に挙ぐるところの経々・宗々を抛つて、一向

ほけきよう ぎよう まこと しようじき ぎようじや そうろう

に法華經を行ずるが眞の正直の行者にては候なり。

しよしん ぎようじや じんい ぼさつ かがれ きょうぎよう

しかるを、初心の行者、深位の菩薩のように彼々の経々

ほけきよう なら ぎよう ふしようじき もの

と法華經とを並べて行ずれば、不正直の者となる。世間の

ほう けんじん にくん つか ていじよ りようおとこ とつ もう

法にも、賢人は二君に仕えず、貞女は両夫に嫁がずと申す、

これなり。

わたくし いぎ もう によらい みらい かんが

また私に異義を申すべきにあらず。如来は未来を鑑み

たま わ めつご しょうほう いっせんねん ぞうほう いっせんねん まつぼう いちまんねん

させ給いて、我が滅後正法一千年・像法一千年・末法一万年

あいだ わ ほうもん ぐつう ひとびと きょうぎよう いちいち

が間、我が法門を弘通すべき人々ならびに経々を、一々

切 当

そうろう

そむ

ひとよ

しゅつたい

にきりあてられて候。しかるに、これを背く人世に出来

ちしや

けんおう

もち

せば、たとい智者・賢王なりとも用いるべからず。いわゆ

わ

めつご

つぎ

ひ

しょうほうごひやくねん

あいだ

いつこう

る「我が滅後の次の日より正法五百年の間は、一向

しょうじようきよう

ぐつう

かしよう

あなん

ないしふなしやとう

じゅうよにん

小乗経を弘通すべし。迦葉・阿難、乃至富那奢等の十余人

のち

ごひやくねん

ごんだいじようきよう

うちけごん

ほうどう

じんみつ

なり。後の五百年には権大乘経の内華嚴・方等・深密・

はんにや

だいにちきよう

かんぎよう

あ 阿 陀 ぎ しようとう

みろくぼさつ

もんじゆしり

般若・大日経・觀経・阿みだ経等を、弥勒菩薩・文殊師利

ぼさつ

めみようぼさつ

りゆうじゆぼさつ

むじやくぼさつ

てんじんぼさつとう

しえ

菩薩・馬鳴菩薩・竜樹菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の四依

だいぼさつとう

だいろんじぐつう

うんぬん

だいろんじ

の大菩薩等の大論師弘通すべし」と云々。これらの大論師は、

ほけきよう

じんぎ

し

法華経の深義を知ろしめさざるにあらず。しかれども、

ほけきようるふ　とき　きた　うち　しゃくそん　おお　つ

法華經流布の時も来らざる上、釈尊よりも仰せ付けられざ

だいほう　こころ　そん　くち　の　たま　とき

る大法なれば、心には存して口に宣べ給わず。ある時は、

くち　さえず　じつぎ　いつこう　かく　の　たま

ほぼ口に轉るようなれども、実義をば一向に隠して演べ給

わす。

ぞうほういつせんねん　うち　い　がっし　ぶつぼうようや　かんど

像法一千年の内に入りぬれば、月氏の仏法漸く漢土・

にほん　わた　きた　せそん　がんぜん　やくおうぼさつとう　しゃつけ　たほう

日本に渡り来る。世尊、眼前に薬王菩薩等の迹化・他方の

だいぼさつ　ほけきよう　はんぶん　しゃくもんじゅうしほん　ゆず　たま

大菩薩に、法華經の半分、迹門十四品を譲り給う。これは

じゆ　だいぼさつ　まつぼう　はじ　しゆつげん　たま　ほんもん

また、地涌の大菩薩、末法の初めに出現せさせ給いて、本門

じゆりようほん　かんじん　なんみようほうれんげきよう　ご　じ　いちえんぶだい

寿量品の肝心たる南無妙法蓮華經の五字を、一閻浮提の

いっさいしゅじょう とな

たも

せんじよ

一切衆生に唱えさせ給うべき先序のためなり。いわゆる

しやくもんぐつう

しゅ

なんかく

てんだい

みようらく

でんぎようとう

迹門弘通の衆は、南岳・天台・妙楽・伝教等これなり。

いま

とき

よ

じようぎようぼさつとう

ごしゅつげん

じこく

あいあ

今の時は、世すでに上行菩薩等の御出現の時剋に相当

よ ぐげん

み

せんそう

たれり。しかるに、余、愚眼をもつてこれを見るに、先相す

顚

でにあらわれたるか。

しよしゅう

よ

けごん

だいにち

あ 弥

陀 きようとう

しかるに、諸宗の依るところの華嚴・大日・阿みだ経等

る ふ

とき

ろん

しょうほういつせんねん

うち

のち

ごひやくねん

は、その流布の時を論ずれば、正法一千年の内、後の五百年、

ないしぞうほう

はじ

じようろん

きようぎよう

にんしとう

乃至像法の始めの諍論の経々なり。しかるに、人師等、

きようぎよう

せんじん

しょうれつとう

めいわく

ほとけ

ゆず

経々の浅深・勝劣等に迷惑するのみならず、仏の譲り

じよう

忘

じき

かんが

しゅうじゅう

かま

状をもわすれ、時機をも勘えず、みだりに宗々を構え、

ぞう まつ ぎよう

れい

はくぞう

たね

お

げんとう

像・末の行となせり。例せば、白蔵に種を下ろして玄冬に

こく

かげん

まんげつ

ご

よなか

にちりん

たず

穀をもとめ、下弦に満月を期し、夜中に日輪を尋ぬるがご

とし。

りっしゅう

もう

しゅう

いつこうしようじよう

いかにいわんや、律宗なんど申す宗は一向小乗なり。

がつし

しようほういつせんねん

さき

ごひやくねん

しようぼう

にほんこく

月氏には正法一千年の前の五百年の小法、また日本国に

ぞうほう

なかごろ

ほけきよう

てんだいしゅう

るふ

さき

ては、像法の中比、法華経・天台宗の流布すべき前に、し

き

じようよう

れい

ひい

ばらく機を調養せんがためなり。例せば、日出でんとて

みようじようさき

た

あめふ

くも

起

ひい

明星前に立ち、雨下らんとて雲まずおこるがごとし。日出

あめふ のち ほし くも 何

で雨下って後の星・雲はなにかせん。しかるに、今は時過ぎ

まつぼう い しゅぎよう じゅうびよう きょうやく さず

ぬ。また末法に入ってこれを修行せば、重病に軽菓を授

たいせき しょうせん の しゅぎよう み くる

け、大石を小船に載するがごとし。修行せば、身は苦し

いとま い しるし はな ひら み ゆえ

く、暇は入って験なく、花のみ開いて菓なからん。故に、

きようだいし ぞうほう まつ しゅつげん ほけきよう しゃくもん かい じよう

教大師、像法の末に出現して、法華經の迹門の戒・定・

え みつ うち なか えんどん かいだん えいざん こんりゆう たま

慧の三つが内、その中の円頓の戒壇を叡山に建立し給いし

とき にひやくごじっかい す お

時、二百五十戒たちまちに捨て畢わんぬ。したがって、ま

がんじん すえ なんとしちだいじ いちじゅうしにん さんびやくよにん かはん

た鑑真の末の南都七大寺の一十四人・三百余人も加判して

だいじよう ひと いっごくごぞ しょうりつぎ す お

大乘の人となり、一国挙って小律儀を捨て畢わんぬ。その

授戒の書を見るべし。分明なり。

授戒じゆかいの書しよを見るみべし。分明ふんみようなり。

しかるを、今、邪智の持斎の法師等、昔捨てし小乗經

といまじゃちじさいほつしとうむかしすしようにうきよう

を取り出だして、一戒もたもたぬ名ばかりなる二百五十戒

ほつしばらあくげぶけおうわくこくし

の法師原有って、公家・武家を誑惑して国師とののしる。

がまんおこだいじようかいひとはいむかい

あまつさえ、我慢を發して大乘戒の人を破戒・無戒と

侮れいくけんししほえんこうたいしやく

あなずる。例せば、狗犬が師子を吠え、猿猴が帝釈をあな

いまりつしゆうほつしばらせけんひとびと

ずるがごとし。今の律宗の法師原は、世間の人々には

じかいじつごものみじつろん

持戒・実語の者のようには見ゆれども、その実を論ずれば、

てんかだいいちだいふじつものゆえかれほんもん

天下第一の大不実の者なり。その故は、彼らが本文とする

しぶんりつ

じゅうじゆりつとう

もん

だいししょうじょう

なか

いつこうししょうじょう

四分律・十誦律等の文は、大小乗の中には一向小乗、

しょうじょう

なか

さいげ

しょうりつ

ざいせ

じゅうにねん

のち

小乗の中にも最下の小律なり。在世には十二年の後、

ほうどうだいじょう

移

休

言葉

めつこ

方等大乘へうつるほどのしばらくのやすめことば、滅後に

しょうほう

さき

ごひやくねん

いつこうししょうじょう

てら

いっこう

は正法の前の五百年は一向小乗の寺なり。これまた一向

だいじょう

てら

きぼう

にほんこく

大乘の寺の毀謗となさんがためなり。されば、日本国には

ぞうほう

なか

がんじんわじょう

だいじょう

てなら

たも

きようだいし

像法の半ばに鑑真和尚、大乘の手習いとし給う。教大師、

か

しゅう

は

たま

ひと

てんだいしゅう

取

越

しゅう

彼の宗を破し給いて、人をば天台宗へとりこし、宗をば

うしな

のち

こと

よし

し

失うべしといえども、後に事の由を知らしめんがために、

わ

だいじょう

でし

つか

助

置

たも

いま

我が大乘の弟子を遣わしてたすけおき給う。しかるに、今

がくしやとう

よし し

ろくしゅう

もと

やぶ

の学者等はこの由を知らずして、六宗は本より破れずして

思

ありとおもえり。はかなし、はかなし。

いちるい

ものとう

てんだい

さいかく

み

わ

りつしゅう

また一類の者等、天台の才学をもつて見れば我が律宗は

ようじやく

ゆえ

ぜんぜん

ぼんもうきよう

移

けつく

ほけきよう

幼弱なる故に、漸々に梵網經へうつりぬ。結句は、法華經

だいかい

わ

しょうりつ

ぬす

い

かえ

えんどん

ぎようじや

の大戒を我が小律に盗み入れて、還つて円頓の行者を

はかい

むかい

わら

こくしゆ

とうじ

ぎようみよう

たつと

けしき

破戒・無戒と咲えば、国主は当時の形貌の貴げなる気色

誑

たま

てんだいしゅう

てら

よ

でんぱたとう

うば

にたばらかされ給いて、天台宗の寺に寄せたる田畠等を奪

と

かれ

与

ばんみん

いつこうだいじよう

てら

きえ

い取つて彼らにあたえ、万民はまた一向大乘の寺の帰依を

なげう

か てら

移

て

ひ

付

にほんいつ

抛つて彼の寺にうつる。手ずから火をつけざれども日本一

こく だいじよう てら や うしな ばつもくちよう いっさい

国の大乗の寺を焼き失い、抜目鳥にあらざれども一切

しゅじよう まなこ ぬ ほとけ しる たも あらかん に せんだい

衆生の眼を抜きぬ。仏の記し給う「阿羅漢に似たる闍提」

とは、これなり。

ねはんぎよう い われねはん のち むりようひやくさい しどう しょうにん

涅槃經に云わく「我涅槃して後、無量百歳、四道の聖人

ねはん しょうほうめつ のち ぞうほう なか

ことごとくまた涅槃せん。正法滅して後、像法の中におい

まさ びくあ りつ たも に すくな きよう

て、当に比丘有るべし。律を持つに似像せて少しく經を

どくじゆ おんじき とんし み ちようよう ないしけさ き

読誦し、飲食を貪嗜してその身を長養す乃至袈裟を服ると

りようし ほそ み しず い ねこ

いえども、なお獵師の細めに視て徐かに行くがごとく、猫の

ねずみ うかが そと けんぜん げん うち とんしつ いだ

鼠を伺うがごとし。外には賢善を現じ、内には貪嫉を懷く。

あほう う ばらもんとう

啞法を受けたる婆羅門等のごとし。 実には沙門にあらずし

しゃもん かたち げん じゃけんしじよう しょうほう ひぼう とう

て沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等

うんぬん きようもん せそんみらい しる お たも

云々。この經文に世尊未来を記し置き給う。

しゃくそん われ けんぷ うえ みようし

そもそも、釈尊は、我らがためには賢父たる上、明師な

しょうじゆ いっしん さんとく そな たま ほとけ ぶつげん

り、聖主なり。一身に三徳を備え給える仏の、仏眼をも

みらいあくせ かんが たま しる お たも きもん のたま

つて未来悪世を鑑み給いて記し置き給う記文に云わく

われねはん のち むりようひやくさい うんぬん ほとけ めつごにせんねんいご

「我涅槃して後、無量百歳」云々。仏の滅後二千年已後と

み しどう しょうにん ねはん うんぬん

見えぬ。また「四道の聖人ことごとくまた涅槃せん」云々。

ふほうぞう にじゅうしにん さ しょうほうめつ のち とううんぬん ぞうまつ

付法蔵の二十四人を指すか。「正法滅して後」等云々。像末

の世よきと聞こえたり。

「当まさに比丘有るべし。律りつを持つにに似像とううんぬんせて」等云々。今いま、

末法まつぽうの代よに比丘びくの似像じぞうを撰えらび出いださば、日本国にほんこくには誰たれの人ひと

をか引ひき出いだして、大覺世尊だいかくせそんをば不妄語ふもうごの人ひととし奉たてまつるべ

き。俗男ぞくなん・俗女ぞくによ・比丘尼びくにをば、この經文きやうもんに載のせたることな

し。ただ比丘びくばかりなり。比丘びくは日本国にほんこくに数かずを知らず。し

かれども、その中なかに三衣一鉢さんえいつぱつを身みに帶たいせねば、似像じぞうと定め

がたし。ただ持齋じさいの法師ほっしばかり相似あいたり。一切いっさいの持齋じさいの中なかに

は、次下つぎしもの文もんに「律りつを持つたもつ」ととけり。律宗りつしゅうより外ほかはまた

のが つぎしも もん すくな きよう どくじゆ うんぬん そうしゆうかまくら

脱れぬ。次下の文に「少しく経を読誦し」云々。相州鎌倉

ごくらくじ りようかんぼう

たれ さ い きようもん

の極楽寺の良観房にあらずば、誰を指し出だして経文を

たてまつ

たすけ奉るべき。

つぎしも もん

りようし

ほそ

み

しず

い

次下の文に「なお獵師の細めに視て徐かに行くがごとく、

ねこ ねずみ うかが

そと

けんぜん

げん

うち

とんしつ

猫の鼠を伺うがごとし。外には賢善を現じ、内には貪嫉を

いだ とうんぬん りようかぼう

たれ

さんねいっぱつ

りようし

懐く」等云々。両火房にあらずば、誰をか三衣一鉢の獵師・

しびよう

ぶっせつ

しん

あわ

とうじ

ぞくなん

伺猫として仏説を信ずべき。哀れなるかな、当時の俗男・

ぞくによ びく にとう だんなとう

やま しか いえ

ねずみ

りようし

俗女・比丘尼等・檀那等が、山の鹿・家の鼠となりて、獵師・

ねこ に

りようかぼう

うかが

誑

こんじよう

猫に似たる両火房に伺われ、たぼらかされて、今生には

しゅごくごくど てんしょうだいじん しょうはちまんとぅ

たこく へいぐん

守護国土の天照太神・正八幡等にすてられ、他国の兵軍に

破

ねこ ねずみ お と

りょうし しか い

やぶられて、猫の鼠を捺さえ取るがごとく、獐師の鹿を射

ころ ぞくなん ぶしとう いふ き ふ ぞくによ

死すがごとし。俗男・武士等は射伏せ切り伏せられ、俗女は

お と たこく 趣 おうしょうくん ようきひ

捺さえ取られて他国へおもむかん。王昭君・楊貴妃がごと

ごしょう むけんだいじょう いちにん おもむ

くになりて、後生には無間大城に一人もなく趣くべし。

よ み ゆえ かれ だんなとう だいあくしん

しかるを、余このことを見る故に、彼が檀那等大悪心を

ごうじょう 責 ゆえ りょうかぼう ないないしょうほう ざんげん くわだ

おそれず強盛にせむる故に、両火房、内々諸方に讒言を企

よ くち ふさ 励

てて余が口を塞がんとはげみしなり。

きょう い なんじ くよう さんあくどう お とううんぬん

また経に云わく「汝を供養せば、三悪道に墮つ」等云々。

ざいせ あらかん くよう ひと

さんあくどう 免

在世の阿羅漢を供養せし人、なお三悪道まぬかれがたし。

めつご おうわく しょうりつ ほっしばら しょうかい

いかにいわんや、滅後の狂惑の小律の法師原をや。小戒の
だいか

ろにゆう

大科をば、これをもつて知んぬべし。あるいはまた驢乳に

たと かね ふん

くけん たと

も譬えたり、還つて糞となる。あるいは狗犬にも譬えたり、

だいじよう ひと ふん じき えんこう かりやく もともと

大乘の人の糞を食す。あるいは猿猴、あるいは瓦礫と云々。

とき わきま き 知 しょうじようかい たも

しかれば、時を弁えず機をしらずして小乗戒を持てば、

だいじよう さわ やぶ かなら あつか まね うえ

大乘の障りとなる。破れば、また必ず悪果を招く。その上、

いま ひとびと しょうりつ もの だいじようかい しょうじようかい ぬす い

今の人々、小律の者どもは、大乘戒を小乗戒に盗み入れ、

ろにゆう ごにゆう い だいじよう ひと 欺 だいちゆうとう もの

驢乳に牛乳を入れて大乘の人をあざむく大偷盗の者、

だいほうぼう

もの

失

ろん

だいばだつた

かた

なら

大謗法の者。そのとがを論ずれば、提婆達多も肩を並べが

くぎやりそんじゃ

あし

およ

えんぶだいいち

だいかくにん

たく、瞿伽利尊者が足も及ばざる閻浮第一の大悪人なり。

きえ

こくど

あんのん

帰依せん国土、安穩なるべしや。

よ

み

じしん

わきま

余このことを見るに、自身だにも弁えなばさてこそある

にほんこく

ちしや

ひとびといちにん

し

くに

べきに、日本国に智者とおぼしき人々一人も知らず、国す

破

でにやぶれなんとす。その上、仏の諫曉を重んずる上、

いちぶん

じひ

催

くに

か

しんみよう

す

もう

一分の慈悲にもよおされて、国に代わつて身命を捨てて申

こくしゅとうかれ

誑

もち

ひといちにん

せども、国主等彼にたばらかされて、用いる人一人もなし。

たと

ねってつ

れいすい

な

すいみん

しし

て

ふ

譬えば、熱鉄に冷水を投げ、睡眠の師子に手を触るるがご

とし。

ここに両火房と申す法師あり。身には三衣を皮のごとく

放

はなつことなし。一鉢は両眼をまぼるがごとし。

にひやくごじつかいかた

たも

さんぜん

いぎ

整

せけん

二百五十戒堅く持ち、三千の威儀をととのえたり。世間の

むち

どうぞく

こくしゆ

始

ばんみん

至

じぞうそんじや

無智の道俗、国主よりはじめて万民にいたるまで、地藏尊者

からだせん

しゆつげん

かしようそんじや

りようぜん

げらい

の伽羅陀山より出現せるか、迦葉尊者の靈山より下来す

うたが

よ

ほけきよう

だいが

かん

かんじほん

はいけん

るかと疑う。余、法華經の第五の卷の勸持品を拝見したて

まつだい

い

ほけきよう

だいおんてきさんるいあ

まつれば、末代に入つて法華經の大怨敵三類有るべし、そ

だいさん

ごうてき

もの

みお

びんぎ

こくてき

の第三の強敵はこの者かと見畢わんぬ。便宜あらば、国敵を

責 かれ だいまん たお ぶつぼう いげん

せめて、彼が大慢を倒して仏法の威験をあらわさんと思う おも

りようかぼうつね こうぎ なげ い にほんこく そう

ところに、両火房常に高座にして歎いて云わく「日本国の僧

に にひやくごじっかい ごひやつかい なんによ ごかい はっさいかいとう いちどう

尼には二百五十戒・五百戒、男女には五戒・八斎戒等を一同

たも おも にちれん がん さわ うんぬん

に持たせんと思うに、日蓮がこの願の障りとなる」と云々。

よ あん い げんしよう つ こと き おも

余、案じて云わく「現証に付いて事を切らん」と思うと

かれつね あめ こころ まか ふ よし ひろう いにしえ

ころに、彼常に雨を心に任せて下らす由、披露あり。古

あめ とくしつ ためし おお

もまた雨をもつて得失をあらわす例これ多し。いわゆる

でんぎようだいし ごみよう しゅびん こうぼう どう りようかぼう

伝教大師と護命と、守敏と弘法と等なり。ここに「両火房、

かみ きう おん おお っ うんぬん

上より祈雨の御いのりを仰せ付けられたり」と云々。ここ

りようかぼうきう

い

ぶんえいはちねんろくがつじゅうはちにち

に、両火房祈雨あり。去ぬる文永八年六月十八日より

にじゅうよつか

つか

ごくらくじ

つか

としごろ

おんなげ

二十四日なり。ここに、使いを極楽寺へ遣わす。「年来の御歎

しちにち

あいだ

いちう

ふ

みでし

きこれなり。七日が間にもし一雨も下らば、御弟子となり

にひやくごじっかい

たも

うえ

ねんぶつむけんじごく

もう

て二百五十戒つぶさに持たん上に、『念仏無間地獄と申すこ

僻読

もう

よ

きぶく

たてまつ

と、ひがよみなりけり』と申すべし。余だにも帰伏し奉ら

わでしとう

にほんこくだいたい

傾

そうら

ば、我が弟子等をはじめて日本国大体かたぶき候いなん」

うんぬん

しちにち

あいだ

さんど

つか

と云々。七日が間に三度の使いをつかわす。しかれども、

いちう

ふ

うえ

たいふう

ひようふう

いかんがしたりけん、一雨も下らざるの上、頽風・颯風・

せんふう

ぼうふうとう

はつふう

じゅうにとき

止

旋風・暴風等の八風、十二時にやむことなし。あまつさえ、

にしちにち

いちう

ふ

かぜ

二七日まで一雨も下らず、風もやむことなし。されば、こ

なにごと

いずみしきぶ

いろこの

のういんほつし

もう

のことは何事ぞ。和泉式部といいし色好み、能因法師と申せ

むかい

もの

か

りようかぼう

忌

みそひともじ

し無戒の者、これは彼の両火房がいむところの三十一字ぞ

か がつし

だいとうぞく

なむぶつ

しょう

てんず

かし。彼の月氏の大盗賊、「南無仏」と称せしかば、天頭を

え

かれ

りようかぼう

しょうとう

にひやくごじつかい

しんごん

得たり。彼の両火房ならびに諸僧等の二百五十戒、真言・

ほつけ

しょうぼう

だいほう

すうひやくにん

ぶつぼう

れいげん

法華の小法・大法の数百人の仏法の靈験、いかなれば、

いんによとう

おうげん

だいぬすびと

しょうぶつ

おと

怪

姪女等の誑言、大盗人が称仏には劣るらんとあやしきこと

かれ

たいか

知

なり。これをもつて彼らが大科をばしらるべきに、さはな

かえ

ざんげん

用

まこと

覚

くして、還つて讒言をもちいらるるは、実とはおぼえず。

せん

にほんこくほうこく

ごきた

詮ずるところは、日本国亡国となるべき期来るか。

きう

あめ ふ

あめ

ぎようみよう

また祈雨のことは、たとい雨を下らせりとも、雨の形貌

いの もの けん ふけん し

あめしゆじゆ

をもつて祈る者の賢・不賢を知ることあり。雨種々なり。

てん あめ

りゆう あめ

しゆら

あめ

あるいは天の雨、あるいは竜の雨、あるいは修羅の雨、あ

そう

かん

らいうとう

いま

きう

るいは麤雨、あるいは甘雨、あるいは雷雨等あり。今の祈雨

いちう ふ

うえ

にしちにち

あいだ

さき

遥

はすべて一雨も下らざる上、二七日が間、前よりはるかに

ちようか

だいかんぼつ

だいくふう

じゆうにとき

とど

りようかぼう

超過せる大旱魃・大悪風、十二時に止まることなし。両火房

まこと ひと

じゃけん

翻

あと

真の人ならば、たちまちに邪見をもひるがえし、跡をも

さんりん

隠

ぎ

おもて

でしだんなとう

山林にかくすべきに、その義なくして、面を弟子檀那等に

晒 うえ

ざんげん くわだ にちれん くび 斬

さらす上、あまつさえ、讒言を企て日蓮が頸をきらせまい

もう うえ 預 ひと くに じよう もう くだ たね

らせんと申す上、あずかる人の国まで状を申し下して種を

断 だいあくにん むち だんなとう じこ

たたんとする大悪人なり。しかるを、無智の檀那等は恃怙し

げんせ くに 破 ごしよう むけんじごく お

て、現世には国をやぶり、後生には無間地獄に堕ちなんこ

ふびん

との不便さよ。

きせきよう い もろもろ しゆじようあ ほういつ しょうじよう

起世経に云わく「諸の衆生有つて放逸をなし、清浄

ぎよう けが ゆえ てん あめ ふ い ふによほう

の行を汚すが故に、天、雨を下らさず」。また云わく「不如法

けんどん しつと じゃけん てんどう ゆえ てんすなわ あめ ふ

あり。慳貪・嫉妬・邪見・顛倒なるが故に、天則ち雨を下ら

きようりつゐそう い ごじあ あめな いち に

さず」。また経律異相に云わく「五事有つて雨無し。一・二・

さん りやく し う し いんらん ご こくおうおさ

三、〈これを略す〉四には雨師姪乱、五には国王理治めず、

う し い か ゆ え あめふ うんぬん きようもん ききよう

雨師瞋るが故に、雨らず」云々。これらの経文の亀鏡を

りようかぼう み さ あ み すこ 曇

もつて両火房が身に指し当てて見よ。少しもくもりなから

いち な じかい 聞 じつ ほういつ

ん。一には名は持戒ときこゆれども実には放逸なるか、二に

けんどん さん しつと し じゃけん ご

は慳貪なるか、三には嫉妬なるか、四には邪見なるか、五に

いんらん いっ 過

は姪乱なるか。この五つにはすぐべからず。

きよう りようかぼういちにん かぎ むかし 鑑

また、この経は両火房一人には限るべからず。昔をかが

いま 知 こうぼうだいし きう とき にしちにち あいだ いちう

み、今をもしれ。弘法大師の祈雨の時、二七日の間、一雨

ふ 怪 おうわく こころ

も下らざりしもあやしきことなり。しかるを、誑惑の心

べうじよう

ひと

てんし

ごきう

あめ

ぬす

と

わ

強盛なりし人なれば、天子の御祈雨の雨を盗み取って「我

あめ

うんぬん

ぜんむいさんぞう

こんごうちさんぞう

ふくうさんぞう

きう

が雨」と云々。善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵の祈雨の

とき

しょうう

さんし

おおかぜれんれん

ふ

時も、小雨は下りたりしかども、三師ともに大風連々と吹い

ちよくし

付

追

浅

てんだいだいし

でんぎよう

て、勅使をつけておわれしあさましさと、天台大師・伝教

だいし

しゆゆ

みつか

あいだ

たいしやくあめ

ふ

しょうふう

ふ

大師の須臾と三日が間に帝釈雨を下らして小風も吹か

尊

覚

ざりしも、たつとくぞおぼゆる、たつとくぞおぼゆる。

ほけきよう

い

あれんにや

のうえ

くうげん

あ

法華経に云わく「あるいは阿練若に納衣にして空閑に在

ないしりよう

とんじやく

ゆえ

びやくえ

ほう

と

つて乃至利養に貪著するが故に、白衣のために法を説いて、

よ

くぎよう

ろくつう

らかん

世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごときもの

有らん。また云わく「常に大衆の中に在つて我らを毀らん

と欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘

衆に向かつて、誹謗して我が悪を説いて乃至惡鬼はその身

に入つて、我を罵詈・毀辱せん。また云わく「濁世の惡比丘

は、仏の方便、宜しきに随つて説きたもうところの法を知

らず、惡口して顰蹙し、しばしば擯出せられん」等云々。

涅槃經に云わく「一闍提有つて、羅漢の像を作して空処に

住し、方等大乗經典を誹謗す。諸の凡夫人見已わつて、

皆『真の阿羅漢にして、これ大菩薩なり』と謂わん」等云々。

あ い つね だいしゅ なか あ われ そし

ほつ ゆえ こくおう だいじん ばらもん こじ よ びく

しゅ む ひぼう われ あく と ないしあつき み

い われ めり きにく い い じよくせ あくびく

ほとけ ほうべん よろ したが と ほう し

あつく ひんしゆく ひんずい どううんぬん

ねはんぎよう い いっせんだい あ らかん かたち な こうしよ

じゆう ほうどうだいじようきようてん ひぼう もろもろ ほんぷにんみ お

みな しん あらかん だいぼさつ い どううんぬん

いま よ ほけきよう ねはんぎよう ぶつきよう どうじ にほん

今、予、法華經と涅槃經との仏鏡をもつて、当時の日本

こく う かげ たれ そう こくしゆ ろくつう らかん

国を浮かべてその影をみるに、誰の僧か国主に六通の羅漢

尊 ほけきよう ぎようじや ざんげん

のごとくたつとまれて、しかも、法華經の行者を讒言して

くび 斬 そう ばんみん だいぼさつ

頸をきらせんとせし。また、いずれの僧か万民に大菩薩と

仰 たれ ちしや ほけきよう ゆえ たびたびしよしよ お

あおがれたる。誰の智者か、法華經の故に度々処々を追わ

くび でし ころ りようど るざい さいご

れ、頸をきられ、弟子を殺され、両度まで流罪せられて最後

くび およ まなこな みみな ひと のぞ まなこあ みみ

に頸に及ばんとせし。眼無く耳無きの人は除く。眼有り耳

あ ひと きようもん けんもん いま ひとびと ひと きようもん

有らん人は經文を見聞せよ。今の人々は、人ごとに經文を

われ 読 われ しん 憎

「我もよむ、我も信じたり」という。ただにくむところは

にちれん

きようもん しん

載

日蓮ばかりなり。經文を信ずるならば、たしかにのせたる

ごうてき

と い

きようもん しん

読

証

強敵を取り出だして、經文を信じてよむしるしとせよ。も

きようもん

どくじゆ

にちれん

怒

ししからずんば、經文のごとく読誦する日蓮をいかれるは、

きようもん

ほとけ

つか

輕

經文をいかれるにあらずや。仏の使いをかるしむるなり。

いま

よ

りようかぼう

ほけきよう

だいさん

ごうてき

しやくそん

今の代の両火房が法華經の第三の強敵とならずば、釈尊

だいもうご

ほとけ

たほう

じつぼう

しよぶつ

ふじつ

しやうみよう

は大妄語の仏、多宝・十方の諸仏は不実の証明なり。ま

きようもん

実

ごきえ

こくしゆ

げんざい

しゆご

ぜん

た經文まことならば、御帰依の国主は、現在には守護の善

じん 捨

くに

ほか

う

ごしやう

あびじごくうたが

神にすてられ、国は他の有となり、後生には阿鼻地獄疑い

かれ

だいあくほう

たつと

ゆえ

りふじん

なし。しかるに、彼らが大惡法を尊ばるる故に、理不尽の

せいどうしゅつたい

か

こくしゅ

びやつけん

こころ

すい

にちれん

政道出来す。彼の国主の僻見の心を推するに、「日蓮は

あみだぶつ

おんてき

ふぼ

こんりゆう

どうとう

しゅうてき

阿弥陀仏の怨敵、父母の建立の堂塔の讐敵なれば、たと

せいどう

曲

ぶつゐ

そむ

てんじん

たも

い政道をまげたりとも、仏意には背かじ。天神もゆるし給う

いさい

語

べし」とおもわるるか。はかなし、はかなし。委細にかたる

しょうじ

もう

こころあ

もの

お

べけれども、これは小事なれば申さず。心有らん者は、推

し

して知んぬべし。

かみ

か

あ

うんでいだいじ

にほんだいいち

たいか

上に書き挙ぐるより雲泥大事なる日本第一の大科、この

くに

しゅつたい

としひさ

くにすで

ぼんしやく

国に出来して年久しくなるあいだ、この国既に梵釈・

にちがつ

してんだいおうとう

しよてん

す

しゅご

しよだいぜんじん

かえ

日月・四天大王等の諸天にも捨てられ、守護の諸大善神も還

だいおんてき

ほけきようしゅぐ

ぼんたいとう

りんごく

しようにん

おお

つて大怨敵となり、法華經守護の梵帝等、隣国の聖人に仰

っ

にほんこく

じぼつ

ぶつぜん

せいじよう

と

思

せ付けて日本国を治罰し、仏前の誓状を遂げんとおぼしめ

すことあり。

そ

しょうぞう

いにしえ

よじよくせ

い

はじ

夫れ、正像の古は、世濁世に入るといえども、始めな

こくど

みだ

しょうけん

まましゅつげん

ふくとく

りしかば、国土さしも乱れず、聖賢も間々出現し、福德の

おうしん

た

せいどう

ま

ばんみん

なお

王臣も絶えざりしかば、政道も曲がることなし。万民も直し

ゆえ

しょうか

たいじ

さんこう

ごてい

さんおう

かりし故に、小科を対治せんがために、三皇・五帝・三王・

さんせいとうしゅつげん

ふんてん

つく

よ

じ

よ

おさ

三聖等出現して墳典を作つて代を治す。世しばらく治まり

ぜんぜん

せいけん

しゅつげん

たりしかども、漸々にすえになるままに、聖賢も出現せず、

ふくとく ひと

さんさい ただい しちなんせんたい

福德の人もすくなければ、三災は多大にして七難先代に

ちようか げてんおよ とき ち か ないてん

超過せしかば、外典及びがたし。その時、治を代えて内典を

もち よ よ 治

用いて世を治す。したがって、世しばらくはおさまる。さ

よすえ ひと あく ひび ぞうちよう

れども、また世末になるままに、人の悪は日々に増長し

せいどう つきづき すいげん ゆえ さんさいしちなんさき

政道は月々に衰減するかの故に、また三災七難先よりいよ

ぞうちよう しょうじようかいとう ちからしるし

いよ増長して、小乗戒等の力驗なかりしかば、その時

ち 代 しょうじよう かいとう とど だいじよう もち だいじよう

治をかえて小乗の戒等を止めて大乘を用ゆ。大乘また

かな ほけきよう えんどん だいかいだん えいざん こんりゆう よ おさ

叶わねば、法華經の円頓の大戒壇を叡山に建立して代を治

でんぎようだいし にほんさんしよ しょうじようかい

めたり。いわゆる、伝教大師、日本三所の小乗戒ならび

けごん　さんろん　ほつそう　さんだいじよう　はしつ
に華嚴・三論・法相の三大乗を破失せし、これなり。

だいし　ろくしゆう　責　お　たも

この大師は、六宗をせめ落とさせ給うのみならず、禪宗

なら　きわ

にほんこく

広

をも習い極め、あまつさえ、日本国にいまだひろまらざり

ほつけしゆう　しんごんしゆう

かんが

い

しやうれつかがみ

けんみつ

し法華宗・真言宗をも勘え出だして勝劣鏡をかけ、顕密

さべつ

こくびやく

せけん

うたが

さん

の差別、黒白なり。しかれども、世間の疑いを散じがた

い

えんりやくねんちゆう

ごにつとう

かんど

ひとびと

たじ

かりしかば、去ぬる延暦年中に御入唐。漢土の人々も他事

かしこ

ほけきよう

だいにちきよう

てんだい

しんごん

にしゆう

には賢かりしかども、法華経・大日経、天台・真言の二宗

しやうれつ

せんじん

ふんみよう

し

たま

ごきちよう

のち

の勝劣・浅深は分明に知らせ給わざりしかば、御帰朝の後、

もと

ごぞんち

みやうらくだいし

き

じゆう

ふくうさんぞう

本の御存知のごとく、妙楽大師の記の十の不空三蔵の

かいげ ことば がんこう 語

ひ の

てんだいすぐ

しんこんおと

改悔の言を含光がかたりしを引き載せて、天台勝れ真言劣

るなる明証を依憑集に定め給う。

るなる明証を依憑集に定め給う。

しんこんしゅう しゅう いちじ けず たも

ゆえ

あまつさえ、真言宗の宗の一字を削り給う。その故は、

ぜんむい こんごうち ふくう さんにん いちぎようあじやり

誑

善無畏・金剛智・不空の三人、一行阿闍梨をたぼらかして、

もと 無 だいにちきよう てんだい こしよう いちねんさんぜん ほうもん ぬす い

本はなき大日経に天台の己証の一念三千の法門を盗み入

ひと ちんぼう わ う だいおうわく もの こころえたま

れて、人の珍宝を我が有とせる大狂惑の者なりと心得給え

れい ちようかんほつし てんだいだいし じつぼうじようじよう かんぼう

り、例せば、澄観法師が天台大師の十法成乗の観法を

けこんきよう ぬす い かえ てんだいしゅう まつきよう くだ

華嚴経に盗み入れて、還って天台宗を末教と下せしがご

ごぞんち しゅう いちじ けず えいざん

しちしゅう

としと御存知あつて、宗の一字を削つて「叡山はただ七宗

うんぬん

たるべし」と云々。

こうぼうだいし

もう

てんかだいいち

じさんきた

しかるを、弘法大師と申せし天下第一の自讃毀他の

だいもうご

ひと

きようだいしごにゆうめつ

のち

たいろん

くげ

掠

大妄語の人、教大師御入滅の後、対論なくして公家をかすめ

はつしゅう

もう

た

ほんし

あと

たてまつりて八宗と申し立てぬ。しかれども、本師の跡を

しょうけい

ひとびと

えいざん

しちしゅう

紹継する人々は叡山はただ七宗にてこそあるべきに、

きようだいし

だいさん

でし

じかくだいし

えいざんだいいち

ざすぎしんかしよう

教大師の第三の弟子・慈覚大師と、叡山第一の座主義真和尚

まつでし

ちしやうだいし

ににん

かんど

わた

たま

とき

の末弟子・智証大師と、この二人は漢土に渡り給いし時、

にほんこく

いつこく

だいじ

じやうろん

てんだい

しんごん

日本国にて一国の大事と諍論せしことなれば、天台・真言

せきがくとう

あ

たも

しやうれつ

せんじん

たず

たも

の碩学等に値い給うごとに勝劣・浅深を尋ね給う。しかる

とき　めいしようとう

しんごんしゅうすぐ

に、その時の明匠等も、あるいは真言宗勝れ、あるいは

てんだいしゅうすぐ

にしゅうさいとう

り　おな　じ

天台宗勝れ、あるいは二宗齊等、あるいは「理は同じく事

こと

言

たし

しょうもん

い

は異なり」といえども、ともに慥かの証文をば出ださず。

にしゅう

がくしやとう

くおく

げん

じかく

二宗の学者等、しかしながら胸臆の言なり。しかるに、慈覺

だいし

がくきわ

きちよう

しよじゅうしかん

つく

大師は学極めずして帰朝して疏十四卷を作れり。いわゆる

こんごうちようきよう

しよしちかん

そしつじきよう

しよしちかん

しよ

金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七卷なり。この疏の

ていたらく

ほけきよう

だいにちきようとう

さんぶきよう

り

おな

じ

為体は、「法華經と大日經等の三部經とは、理は同じく事

こと

とうろんぬん

しよ

まごころ

だいにちきよう

しよ

ぎしやく

は異なり」等云々。この疏の心は、大日經の疏と義釈と

まごころ

い

ふしん

明

ゆえ

の心を出だすか。なお不審あきらめがたかりけるかの故に、

ほんぞん　みまえ　しよ　さ　お　しよ　ぶつ　い　かな　否

本尊の御前に疏を指し置いて「この疏、仏意に叶えりやいな

き　請

や」と祈せいせしところに、夢に日輪を射ると云々。うち

驚

きちむ

しんごんすぐ

うたが

おどろきて「吉夢なり。真言勝れたること疑いなし」とお

せんじ

もう

くだ

にほんこく

ぐつう

たま

もいて、宣旨を申し下す。日本国に弘通せんとし給いしが、

えきびよう病

しかげつ

もう

あと

失

たま

ほどなく疫病やみて四箇月と申せしかば、跡もなくうせ給

いぬ。

ちしようだいし

じかく

おん

みでし

しかるに、智証大師は慈覚の御ためにも御弟子なりしか

ゆいごん

まか

せんじ

もう

くだ

たも

しんごん

ば、遺言に任せて宣旨を申し下し給う。いわゆる、「真言・

ほつけさいとう

たと

とり

ふた

つばさ

ひと

りようもく

法華齊等なり。譬えば、鳥の二つの翼、人の両目のごと

えいざん はつしゅう

うんぬん

りようにな

し、また「叡山も八宗なるべし」と云々。この兩人は、

み えいざん くも うえ ふ

こころ どうじりちゅう ちり

身は叡山の雲の上に臥すといえども、心は東寺里中の塵に

交 ほんし ゆいせき しょうけい

かえ しょうにん

まじわる。本師の遺跡を紹継するようにて、還つて聖人の

しょうぎ こつしよ たま ほけきよう しょきよう なか

もつと

正義を忽諸し給えり。法華經の「諸經の中において最も

かみ あ かみ じ 打 返

だいにちきよう しも

その上に在り」の「上」の字をうちかえして大日經の下に

お だいし おんてき

ぞんがい しゃか

置き、まず大師の怨敵となるのみならず、存外に釈迦・

たほう じつぼうふんじん だいにちにようらいとう しょぶつ しゅうてき

たも

多宝・十方分身・大日如来等の諸仏の讐敵となり給う。さ

じかくだいし ゆめ にちりん い み

ぶつぼう

れば、慈覺大師の夢に日輪を射ると見しはこれなり。仏法の

たいか

にほんこくぼうこく

せんちよう

大科これよりはじまる。日本国亡国となるべき先兆なり。

とうりよう

ほけきよう

すで

だいにちきよう

てんりよ

おうぼう

棟梁たる法華経、既に大日経の椽栂となりぬ。王法も

げこくじよう

おうい

しんか

したが

とき

いちるい

下剋上して王位も臣下に随うべかりしを、その時また一類

がくしやあ

かた

ほうもん

じようろん

うえ

ぎす

りようほう

の学者有つて堅くこの法門を諍論せし上、座主も両方を

か

こと

切

よ

滅

兼ねて、事いまだきれざりしかば、世もたちまちにほろび

れい

げてん

い

たいこく

そうしんしちにん

ずありけるか。例せば、外典に云わく「大国には諍臣七人、

ちゆうこく

ごにん

しようこく

さんになそうろん

せいどう

中国には五人、小国には三人諍論すれば、たとい政道に

みようごしゆつたい

くにやぶ

ないしいえ

いさ

こ

ふぎ

謬誤出来すれども国破れず乃至家に諫むる子あれば、不義

もう

ぶつけ

におちず」と申すがごとし。仏家もまたかくのごとし。

てんだい

しんごん

しようれつ

せんじんこと切

しようしよう

さいなん

天台・真言の勝劣・浅深事きれざりしかば、少々の災難

しゅつたい

せいてん

す

こうち

おか

は出来せしかども、青天にも捨てられず黄地にも犯されず、

いっこく うち

にんのうしちじゅうしちだいごしらかわ

一国の内のことにてありしほどに、人王七十七代後白河の

ほうおう ぎょう あ

てんだいざす

みょううん

でんぎようだいし

し

法皇の御宇に当たつて、天台座主・明雲、伝教大師の止

かんいん ほけきよう さんぶ す

じかくだいし

そうじいん

だいにちきよう

観院の法華経の三部を捨てて、慈覚大師の総持院の大日経

さんぶ つ たも

てんだいさん

な

しんごん やま

の三部に付き給う。天台山は名ばかりにて、真言の山にな

ほけきよう

しよりよう

だいにちきよう

ち

てんだい

しんごん

り、法華経の所領は大日経の地となる。天台と真言と、

ざす だいしゅ

てきたい

ついで

くに

おう

しん

そうろん

座主と大衆と、敵対あるべき序なり。国また王と臣と諍論

おう しん

したが

ついで

いっこくみだ

たこく

やぶ

して、王は臣に随うべき序なり。一国乱れて他国に破ら

ついで

みょううん

よしなか

ころ

いん

きよ

るべき序なり。しかれば、明雲は義仲に殺されて、院も清

もり 随 たも
盛にしたがいられ給う。

しかれども、公家も叡山も共にこの故としらずして世静よしず

かならずすぐるほどに、災難次第に増長して、人王にんのう

はちじゅうにだいいおきのほうおう

ぎよう

いた

いっさいお

にさいお

八十二代隱岐法皇の御宇に至って、一災起れば二災起こ

もう

ぜんしゆう

ねんぶつしゆうお

あ

ぜんどうぼう

ほけきよう

ると申して、禅宗・念仏宗起こり合いぬ。善導房は、法華經

まつだい

せん

なか

ひと

な

書

ほうねん

しゃへいかくほう

は末代には「千の中に一りも無し」とかき、法然は「捨閉閣抛」

うんぬん

ぜんしゆう

ほけきよう

うしな

きようげ

べつでん

と云々。禅宗は、法華經を失わんがために、「教外に別伝

もんじ

た

言

みつ

だいかくほう

はな

なら

し、文字を立てず」とののしる。この三つの大惡法、鼻を並

いっこく

しゅつげん

ゆえ

くに

ぼんしゃくにてん

べて一国に出現せしが故に、この国すでに梵釈二天・

にちがつ しおう すす たてまつ しゆご ぜんじん かえ だいおんてき

日月・四王に捨てられ奉り、守護の善神も還つて大怨敵と

たも そうでん しよじゆう せ したが

ならせ給う。しかれば、相伝の所従に責め随えられて、

しゆじよう じようこうとも えびすじま はな たま おんかえ

虚

主上・上皇共に夷島に放たれ給い、御返りなくしてむな

しま ちり たも

しき島の塵となり給う。

せん じつきよう しよりよう うば と ごんきよう

詮ずるところは、実経の所領を奪い取つて権経たる

しんごん ちぎよう うえ にほんこく ばんみんとう ぜんしゆう ねんぶつしゆう

真言の知行となせし上、日本国の万民等、禅宗・念仏宗の

あくほう もち ゆえ てんかだいいち せんだいみもん げこくじようしゆつたい

悪法を用いし故に、天下第一、先代未聞の下剋上出来せり。

そうしゆう ほうぼう ひと うえ ぶんぶ 極 っ

しかるに、相州は、謗法の人ならぬ上、文武きわめ尽くせ

ひと てんゆる こくしゆ

し人なれば、天許し国主となす。したがって、世しばらく静

しず

かなりき。しかれども、また、先に王法を失いし真言、漸さき おうぼう うしな しんごん ようや

く関東に落ち下る。存外に崇重せらるる故に、鎌倉また還かんとく お くだ ぞんがい すうちよう ゆえ かまくら かせ

つて大謗法・一闡提の官僧・禅僧・念佛僧の檀那と成つて、だいほうぼう いっせんたい かんそう ぜんそう ねんぶつそう だんな な

新寺を建立して旧寺を捨つる故に、天神は眼を瞋らしてしんでら こんりゆう きゆうじ す ゆえ てんじん まなこ いか

この国を睨め、地神は憤りを含んで身を震う。長星はくに にら ちじん いきどお ふく み ふる ちようせい

一天に覆い、地震は四海を動かす。いってん おお じしん しかい うご

余これらの災天に驚いて、ほぼ内典五千・七千、外典三千よ さいよう おどろ ないてんごせん しちせん げてんさんぜん

等を引き見るに、先代にも希なる天変地天なり。しかれどとう ひ み せんたい まれ てんぺんちよう

も、儒者の家には記せざれば知ることなし。仏法は自迷なじゆしゃ いえ き し ぶつぼう じめい

ればこころえず。この災天は、常の政道の相違と世間の謬誤

しゅつたい

より出来せるにあらず、定めて仏法より事起こるかと勘

えなしぬ。

おおじしん

つ

い

しょうかがんねん

しよ

いっかんしる

まず、大地震に付いて去ぬる正嘉元年に書を一卷注した

こさいみようじのにゆうどうどの

たてまつ

おんたず

おんもち

りしを、故最明寺入道殿に奉る。御尋ねもなく、御用い

こくしゆ

おんもち

ほつし

過

もなかりしかば、「国主の御用いなき法師なれば、あやまち

とが

思

ねんぶつしや

だんなとう

たりとも科あらじ」とやおもいけん、念仏者ならびに檀那等、

ひとびと

どうい

き

よなか

にちれん

また、さるべき人々も同意したるとぞ聞こえし。夜中に日蓮

しょうあん

すうせんにお

よ

さつがい

が小庵に数千人押し寄せて殺害せんとせしかども、いかな

がしたりけん、その夜の害もまぬかれぬ。しかれども、心こころ

をあ合わせたることなれば寄せたる者も科なくて、大事のだいじ

政道を破る。「日蓮せいどう やぶが生きたる、不思議にちれん い ふしぎなり」とて、伊豆国いずのくに

へ流しぬ。なが

されば、人のあまりにひとにくきには、我がほろぶべきとが憎 滅 科を

もかえりみざるか、御式目をも破らるるか。御起請文を見る顧 ごしきもく やぶ ごきしようもん み

に、梵釈・四天・天照太神・正八幡等を書きのせたてまぼんしゃく してん てんしょうだいじん しょうはちまんとく か 載

つる。余、存外の法門を申さば、子細を弁えられずば、日本よ ぞんがい ほうもん もう しさい わきま にほん

国の御帰依の僧等に召し合わせられて、それになお事ゆかこく ごきえ そうとう め あ こと

かんど がつし

たず

かな

しさい

ずば、漢土・月氏までも尋ねらるべし。それに叶わずば、子細

待

しさい

わきま

ひとびと

ありなんとて、しばらくまたるべし。子細も弁えぬ人々が、

み 滅

さ 置

だいじ

きしよう

やぶ

身のほろぶべきを指しおきて、大事の起請を破らるること、

こころ 得

心えられず。

じさん

に

ほんもん

まか

もう

よ

にほんこく

自讃には似たれども、本文に任せて申す。余は、日本国の

ひとびと

かみ

てんし

しも

ばんみん

みつ

ゆえ

人々には上は天子より下は万民にいたるまで三つの故あり。

いち

ふぼ

に

ししよう

さん

しゆくん

おんつか

一には父母なり、二には師匠なり、三には主君の御使いな

きよう

い

すなわ

によらい

つか

い

げんもく

り。経に云わく「即ち如来の使いなり」。また云わく「眼目

い

にちがつ

しょうあんだいしい

かれ

なり」。また云わく「日月なり」。章安大師云わく「彼がた

あく

のぞ

すなわ

かれ

おや

とううんぬん

めに悪を除くは、則ちこれ彼が親なり」等云々。しかるに、

ほうぼう

いっせんたい

こくてき

ほっしばら

ざんげん

もち

ぎ

わきま

謗法・一闡提の国敵の法師原が讒言を用いて、その義を弁

そう

くに

だいじ

せいどう

ま

えず、左右なく国の大事たる政道を曲げらるるは、わざと

災

招

わざわいをまねかるるか。はかなし、はかなし。しかるに、

こと 静

とが

は

ゆえ

事しずまりぬれば、科なきことは恥ずかしきかの故に、ほ

め かい

こさいみようじのにゆうどうどの

はや

どなく召し返されしかども、故最明寺入道殿もまた早く

隠

たま

かくれさせ給いぬ。

とうおんとき

な

み

きず

被

でし

当御時に成つて、あるいは身に疵をかぶり、あるいは弟子

ころ

しよしよ

お

宿

攻

を殺され、あるいは所々を追ひ、あるいはやどをせめしか

いちにちかたとき

ちじょう

す

たよ

ば、一日片時も地上に栖むべき便りなし。これにつけても、

ほとけ

いっさいせけん

あだおお

しん

がた

と

お

たも

仏は「一切世間に怨多くして信じ難し」と説き置き給う。

もろもろ

ぼさつ

われ

しんみよう

あい

むじようどう

お

諸の菩薩は「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむの

ちか

とうじようがしやく

くわ

ひんずい

み」と誓えり。「刀杖瓦石を加う」「しばしば擯出せられん」

もん

まか

るさい

かたな

先

ほけきよう

の文に任せて、流罪せられ、刀のさきにかかりなば、法華經

いちぶ読

思

切

ふきよう

一部よみまいらせたるにこそとおもいきりて、わざと不輕

ぼさつ

かくとくびく

りゆうじゆぼさつ

だいばぼさつ

菩薩のごとく、覺徳比丘のように、竜樹菩薩・提婆菩薩・

ぶつだみった

ししそんじや

ごうじよう

もう

張

仏陀密多・師子尊者のごとく、いよいよ強盛に申しはる。

こんど

ほけきよう

だいおんてき

み

きようもん

ふぼ

今度、法華經の大怨敵を見て、經文のごとく、父母・

ししよう

ちようてき

しゆくせ

かたき

さんざん

せ

さだ

師匠・朝敵・宿世の敵のごとく散々に責むるならば、定め

ばんにん

怒

こくしゆ

ざんげん

おさ

るざい

くび

およ

て万人もいかり、国主も讒言を収めて、流罪し、頸にも及ば

とき

ぶつぜん

せいじよう

ぼんしやく

にちがつ

してん

んずらん。その時、仏前にして誓状せし梵釈・日月・四天

がん

果

ほけきよう

ぎようじや

怨

の願をもはたさせたてまつり、「法華經の行者をあだまん

しゆく

逃

きしよう

み

当

こころ

ものを須臾ものがさじ」と起請せしを、身にあてて心みん。

しやくそん

たほう

じつぼうふんじん

しよぶつ

とも

しゆく

釈尊・多宝・十方分身の諸仏の、あるいは共に宿し、あ

ころも

おお

しゆく

懇

と

るいは衣を覆われ、あるいは守護せんとねんごろに説かせ

たま

まこと

そらごと

し

しんじん

ぞうちよう

給いしをも、実か虚言かと知って信心をも増長せんと

たいてん

励

あん

違

い

ぶんえいはちねん

退転なくはげみしほどに、案にたがわず、去ぬる文永八年

くがつじゅうににち

いちぶん

とが

さどのくに

るざい

九月十二日、すべて一分の科もなくして佐土国へ流罪せら

そと

おんる

こ

うち

くび

き

さだ

る。外には遠流と聞こえしかども、内には頸を切ると定め

ぬ。

よ

余、また、兼ねてこのことを推せし故に、弟子に向かつ

い

わ

がん

すで

と

よろこ

み

あま

じんしん

て云わく「我が願、既に遂げぬ。悦び身に余れり。人身は

う

やぶ

かこおんのんごう

よし

受けがたくして破れやすし。過去遠々劫より由なきことに

み

うしな

ほけきよう

いのち

捨

は身をば失いしかども、法華経のために命をすてたるこ

われ

くび

は

ししそんじや

た

あと

つ

とはなし。我、頸を刎ねられて、師子尊者が絶えたる跡を継

てんだい

でんぎよう

く

こ

ふほうぞう

にじゅうごにん

ひと

ぎ、天台・伝教の功にも超え、付法蔵の二十五人に一りを

くわ にじゅうろくにん

ふきようぼさつ ぎよう

こ しやか

加えて二十六人となり、不軽菩薩の行にも越えて釈迦・

たほう じつぼう しよぶつ

歎

おも

多宝・十方の諸仏にいかがせんとなげかせまいらせん」と思

ゆえ

ことば

惜

いぜん

のち

いし故に、言をもおしまず、已前にありしこと、後にある

よう

たいらのきんご

もう

ふく

ことば

繁

べきことの様を平金吾に申し含めぬ。この語しげければ、

いさい

書

委細にはかかず。

にほんこく

こくしゆ

ばんじ

こころ

まか

たま

そもそも、日本国の国主となりて、万事を心に任せ給え

なにごと

りようほう

め

あ

しょうぶ

けつ

ごせいばい

り。何事も両方を召し合わせてこそ勝負を決し御成敗をな

ひと

にちれんいちにん

かぎ

しよそうとう

め

あ

す人の、いかなれば、日蓮一人に限って、諸僧等に召し合わ

たいか

おこな

せずして大科に行わるらん。これひとえに、ただ事にあ

ごと

にちれん たいか もの

らず。たとい日蓮は大科の者なりとも、国は安穩なるべか

ごしきもく み

ごじゅういちかじょう

た お

らず。御式目を見るに、五十一箇条を立てて、終わりに

きしようもん

か の

だいいち

だいに

しんじ

ぶつじ

ないしごじゅういち

起請文を書き載せたり。第一・第二は神事・仏事、乃至五十一

とううんぬん

しんじ

ぶつじ

かんよう

ほけきよう

て

握

もの

等云々。神事・仏事の肝要たる法華經を手ににぎれる者を、

ざんにんとう

め

あ

かれ

もう

くび

およ

讒人等に召し合わせられずして、彼らが申すままに頸に及

たじ

なか

きしようもん

そうい

せいどう

あ

ぶ。しかれば、他事の中にもこの起請文に相違する政道は有

だいいち

だいいち

にちれん

憎

くに

変

るらめども、これは第一の大事なり。日蓮がにくさに国をか

み うしな

え身を失わんとせらるるか。

ろ あいこう わす

だいいち

しる

魯の哀公が忘るることの第一なることを記せらるるには、

わたまし

つま

忘

うんぬん

こうしい

み

もの

「移宅に妻をわする」と云々。孔子云わく「身をわするる者

こくしゆ

な

せいどう

ま

うんぬん

あり。国主と成つて政道を曲ぐる、これなり」云々。はた

こくしゆ

いきい

し

たま

また国主はこのことを委細には知らせ給わざるか。いかに

し

たま

述

ほけきよう

だいおんてき

な

たま

知らせ給わずとのべらるるとも、法華經の大怨敵と成り給

じゆうか

のが

いぬる重科は脱るべしや。

たほう

じつぽう

しよぶつ

みまえ

きようしゆしやくそん

もう

ぐち

多宝・十方の諸仏の御前にして、教主釈尊の申し口と

まつだいとうせい

と

たま

もろもろ

ぼさつしる

して末代当世のことを説かせ給いしかば、諸の菩薩記し

い

あつき

み

い

われ

めり

きにく

ないし

て云わく「悪鬼はその身に入つて、我を罵詈・毀辱せん乃至

ひんずい

とううんぬん

しぶつ

しやくそん

と

しばしば擯出せられん」等云々。また四仏・釈尊の説くと

さいしようおうきよう

い

あくにん

あいぎよう

ぜんにん

じばつ

ころの最勝王経に云わく「悪人を愛敬し善人を治罰する

よ

ゆえ

ないしたほう

おんぞくきた

こくじんそうらん

あ

とう

に由るが故に乃至他方の怨賊来つて、国人喪乱に遭わん」等

うんぬん

にちれん

きようせん

たも

きようしゆしやくそん

云々。たとい日蓮をば輕賤せさせ給うとも、教主釈尊の

きんげん

たほう

じつぽう

しよぶつ

しようみよう

むな

いっさい

金言、多宝・十方の諸仏の証明は空しかるべからず。一切

しんごんし

ぜんしゆう

ねんぶつしやとう

ほうぼう

あくびく

さき

の真言師・禅宗・念仏者等の謗法の悪比丘をば前より

ごきえ

たいか

し

たま

すこ

てん

御帰依ありしかども、その大科を知らせ給わねば、少し天も

ゆる

ぜんじん

捨

にちれん

しゆつげん

許し善神もすてざりけるにや。しかるを、日蓮が出現して、

いっさい

ひと

おそ

しんみよう

す

さ

もう

けん

こくしゆ

一切の人を恐れず、身命を捨てて指し申さば、賢なる国主

しさい

き

たも

き

もち

ならば子細を聞き給うべきに、聞きもせず用いられざるだ

ふしぎ

くび およ

にも不思議なるに、あまつさえ頸に及ばんとせしことは

ぞんがい しだい

存外の次第なり。

だいたくになんもち たいか しょうほう だいぜんになん ちじよく

しかれば、大悪人を用いる大科、正法の大善人を恥辱す

だいたい にくはな なら くに しゅつげん たと しゅら

る大罪、二悪鼻を並べてこの国に出現せり。譬えば、修羅

くぎよう につてん いたてまつ ゆえ ぜんだいみもん だいじ

を恭敬し日天を射奉るがごとし。故に、前代未聞の大事こ

くに お せんれい か けつおう

の国に起こるなり。これまた先例なきにあらず。夏の桀王は

りゅうほう こうべ は いん ちゅうおう ひかん むね 裂 にせいおう

竜逢が頭を刎ね、殷の紂王は比干が胸をさき、二世王は

りし ころ うだえんおう びんずるそんじや べつじよ だん みらおう

李斯を殺し、優陀延王は賓頭盧尊者を蔑如し、檀弥羅王は

ししそんじや くび 斬 ぶおう えおんほつし じようろん けんそうおう

師子尊者の頸をきる。武王は慧遠法師と諍論し、憲宗王は

はくきよい おんる きそうこうてい ほうどうさんぞう かお かなやき 差

白居易を遠流し、徽宗皇帝は法道三蔵の面に火印をさす。

みな かんぎよう もち かえ あだ な

これらは皆、諫曉を用いざるのみならず、還つて怨を成せ

ひとびと げんせ くに ほろ み うしな ごしよう あくどう お

し人々、現世には国を亡ぼし身を失い、後生には悪道に墮

ひと 悔 さんげん い り っ

つ。これまた人をあなずり、讒言を納れて理を尽くさざり

ゆえ

し故なり。

い ぶんえいじゅういちねんにがっ さどのくに め かえ

しかるに、去ぬる文永十一年二月に佐土国より召し返さ

どうしがっ ようか へいのきんご たいめん とき りふじん

れて、同四月の八日に平金吾に対面してありし時、理不尽の

ごかんき よし さいい もう ふく うら くに

御勘気の由、委細に申し含めぬ。また「恨むらくは、この国

たこく やぶ 浅 なげ もう

すでに他国に破れんことのあさましさよ」と歎き申せしか

ば、金吾きんごが云いわく「いずれの比ころか大蒙古だいもうこは寄せ候ようこうべき」

と

きようもん

ふんみよう

ねんげつ

さ

と問といしかば、「経文きやうもんには分明ふんみように年月ねんげつを指さしたることはな

てん

みけしき

はいけん

たてまつ

ほか

けれども、天てんの御氣色みけしきを拝見はいけんし奉たてまつるに、もつての外ほかにこ

くに

にら

たも

ことし

いちじようよ

おぼ

よ

の国くにを睨にらみさせ給たもうか。今年ことしは一定寄せぬと覚おぼう。もし寄

いちにん

おもて

む

もの

するならば、一人いちにんも面おもてを向むかう者ものあるべからず。これまた

てん

せ

にちれん

和殿原わだんげん

もち

天てんの責せめなり。日蓮にちれんをばわどのばらが用もちいぬものなれば、

ちからおよ

しんごんしとう

じようぶくおこな

力ちから及およばず。あなかしこ、あなかしこ。真言師等しんごんしとうに調伏行じようぶくおこな

たも

おこな

あ

わせ給たもうべからず。もし行おこなわするほどならば、いよいよ悪あ

よし

もう

っ

かえ

じようげとも

しかるべき」由よし、申し付もうけて、さて帰かえつてありしに、上下共じようげとも

さき

もち

うえ

もと

ぞんち

こくおん

に先のごとく用いざりげにある上、本より存知せり、「国恩

ほう

さんど

かんぎよう

もち

さんりん

を報ぜんがために三度までは諫曉すべし。用いずば、山林

み かく

思

じようこ

ほんもん

さんど

に身を隠さん」とおもいしなり。また上古の本文にも「三度

諫

もち

さ

ほんもん

まか

のいさめ用いずば去れ」という。本文に任せて、しばらく

さんちゆう

まか い

うえ

こくしゆ

もち

たま

山中に罷り入りぬ。その上は、国主の用い給わざらん

い げ

ほうもんもう

なに

もう

くに

助

それ已下に法門申して何かせん。申したりとも、国もたすか

ひと

ほとけ

成

覚

るまじ。人もまた仏になるべしとおおぼえず。

ねんぶつむけんじごく

あみだきよう

よ

もう

また「念仏無間地獄、阿弥陀経を読むべからず」と申す

わたくし

ことば

そ

み だねんぶつ

もう

ことも、私の言にはあらず。夫れ、弥陀念仏と申すは、

みなもと

しやかによらい

ごじゅうよねん

せつぼう

うち

さきしじゅうよねん

うち

源、釈迦如来の五十余年の説法の内、前四十余年の内

あみだきょうとう

さんぶきよう

しゅつたい

によらい

阿弥陀経等の三部経より出来せり。しかれども、「如来の

きんげん

さだ

しんじつ

しん

金言なれば、定めて真実にてこそあるらめ」と信ずるとこ

のちはちねん

ほけきよう

じよぶん

むりようぎきよう

ほとけ

ほけきよう

ろに、後八年の法華経の序分たる無量義経に、仏、法華経

と

たま

しじゅうよねん

きようぎよう

ねん

を説かせ給わんために、まず四十余年の経々ならびに年

きとう

かぞ

しんじつ

あらわ

ないしつい

紀等をつぶさに数えあげて、「いまだ真実を顕さず乃至終

むじようぼだい

じよう

え

きようぎよう

に無上菩提を成ずることを得ず」と、そこばくの経々な

ほうもん

いちごん

う

け

たも

たと

たいすい

らびに法門をただ一言に打ち消し給うこと、譬えば、大水の

しょうか

消

おおかせ

もろもろ

そうもく

つゆ

お

小火をけし、大風の衆の草木の露を落とすがごとし。し

のち しょうしゅう ほうきよう だいいつかん いた せそん ほうひさ

かる後に、正宗の法華經の第一卷に至つて、「世尊は法久

のち かなら まさ しんじつ と

しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」、また云わ

しょうじき ほうべん す むじようどう と

く「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」と説き

たも たと やみよ だいげつりん しゅつげん だいとう た のち

給う。譬えば、闇夜に大月輪の出現し、大塔を立てて後、

あししろ き す

足代を切り捨つるがごとし。

のち じつぎ さだ い いま さんがい みな わ

しかる後、実義を定めて云わく「今この三界は、皆これ我

う なか しゅじよう わ こ

が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり。

いま ところ もろもろ げんなんおお われいちにん

しかるに今この処は、諸の患難多し。ただ我一人のみ、

よ くご きようしいう しんじゆ ないし

能く救護をなす。また教詔すといえども、信受せず乃至

きよう どくじゆ しよじ

もの み

きようせんぞうしつ

経を讀誦し書持することあらん者を見て、輕賤憎嫉して、

けつこん

いだ

ひと

みようじゆう

あびごく

い

とう

結恨を懷かん。その人は命終して、阿鼻獄に入らん」等

うんぬん

きようもん

しだい

ふつう

しようそう

ほう

に

つね

云々。經文の次第、普通の性相の法には似ず。常には

ごぎやく

しちぎやく

ざいにん

あびじごく

さだ

そうろう

五逆・七逆の罪人こそ阿鼻地獄とは定めて候に、これは

そうら

ざいせ

めつご

いっさいしゆじよう

あみだきようとう

さにては候わず。在世・滅後の一切衆生、阿弥陀經等の

しじゆうよねん

きようぎよう

かた

しゆう

ほけきよう

移

四十余年の経々を堅く執して法華經へうつらざらんと、

ほけきよう

い

ほんしゆう

す

かれがれ

きようぎよう

たとい法華經へ入るとも本執を捨てずして彼々の経々

ほけきよう

なら

しゆぎよう

ひと

じしゆう

きようぎよう

を法華經に並べて修行せん人と、また自執の経々を

ほけきよう

すぐ

言

ひと

ほけきよう

ほう

しゆぎよう

法華經に勝れたりといわん人と、法華經を法のごとく修行

ほけきよう　ぎようじや　ちじよく　もの　しよにん　さ

すとも法華經の行者を恥辱せん者と、これらの諸人を指し

詰　ひと　みようじゆう　あびごく　い　さだ

つめて、「その人は命終して、阿鼻獄に入らん」と定めさ

たま

せ給いしなり。

しやかいちぶつ　おお　げどう

このことは、ただ釈迦一仏の仰せなりとも、外道にあら

うたが　い　こんとう　しよきよう　せつ　いろ

ずば疑うべきにてはあらねども、已今当の諸經の説に色

変　おも　表　ほうじようせかい　たほう

をかえて重きことをあらわさんがために、宝淨世界の多宝

によらい　みずか　きたま　しょうにん　たも　しやか

如来は、自らはるばる来給いて証人とならせ給う。釈迦

によらい　せんぱん　だいにちきよう　あみだきよう　ねんぶつとう　かた　しゆう　のち

如来の先判たる大日經・阿弥陀經・念仏等を堅く執して後

ほけきよう　い　ひとびと　にゆうあびごく　いちじよう

の法華經へ入らざらん人々は入阿鼻獄は一定なりと

しようみよう

あみだぶつとう

じつぼう

しよぶつ

おのおの

くにぐに

す

証明し、また阿弥陀仏等の十方の諸仏は、各々の国々を捨

りようぜん

こくうえ

もう

たま

ほうじゆげ

ざ

こうちようぜつ

い

てて靈山・虚空会に詣で給い、宝樹下に坐して広長舌を出

だいぼんてん

っ

たも

むりようむへん

にじ

こくう

た

だし大梵天に付け給うこと、無量無辺の虹の虚空に立ちた

らんがごとし。

こころ

しじゅうよねん

なか

かんぎよう

あみだきよう

ひけきようとう

ほうぞう

心は、四十余年の中の觀經・阿弥陀經・悲華經等に、法蔵

びくとう

もろもろ

ぼさつ

しじゅうはちがんとく

おこ

ぼんぷ

くほん

比丘等の諸の菩薩、四十八願等を發して凡夫を九品の

じようど

らいぎう

と

ほけきよういぜん

休

浄土へ来迎せんと説くことは、しばらく法華經已前のやす

いごば

じつ

かれがれ

きようぎよう

もん

じつぼうさいほう

め言なり。実には、彼々の経々の文のごとく十方西方へ

らいぎう

まいと

思

しゃかぶつ

の来迎はあるべからず。実とおもうことなかれ。釈迦仏の

いまと たも

じつ

しやか

たほう

じつぽう

しよぶつ

今説き給うがごとし。実には、釈迦・多宝・十方の諸仏、

じゆりゆうほん

かんよう

なんみようほうれんげきよう

ごじ

しん

寿量品の肝要たる南無妙法蓮華經の五字を信ぜしめんが

い

たも

こうちようぜつ

われ

しやかぶつ

おな

ためなりと出だし給う広長舌なり。我らと釈迦仏とは同じ

ほど ほとけ

しやかぶつ

てんげつ

われ

すいちゆう

かげ

つき

程の仏なり。釈迦仏は天月のごとし、我らは水中の影の月

しやかぶつ

ほんど

まこと

しやばせかい

てんげつうご

たま

なり。釈迦仏の本土は実には娑婆世界なり。天月動き給わ

われ

移

ど

こじゆう

ほけきよう

ずば、我らもうつるべからず。この土に居住して法華經の

ぎようじや

しゆゐ

しんか

しゆじよう

あお

たてまつ

行者を守護せんこと、臣下が主上を仰ぎ奉らんがごと

ふぼ

いっし

あい

い

たも

した

く、父母の一子を愛するがごとくならんと出だし給う舌な

り。

その時、阿弥陀仏の一・二の弟子、観音・勢至等は、

あみだぶつ えんばい そうよく そう しん りようもく

阿弥陀仏の塩梅なり、双翼なり、左右の臣なり、両目のご

ごくらくせかい おんとも たてまつ

とし。しかるに、極楽世界よりはるばると御供し奉りた

むりようぎきよう とき ほとけ あみだきようとう しじゅうはちがんとく

りしが、無量義経の時、仏の阿弥陀経等の四十八願等は「い

しんじつ あらわ ないしほけきよう いち あみだ な

まだ真実を顕さず、乃至法華経にて「一に阿弥陀と名づ

な ほうもん しんじつ と たま

く」と名をあげて、これらの法門は真実ならずと説き給い

まこと おぼ あみだぶつまさ きた がってん

しかば、実とも覚えざりしに、阿弥陀仏正しく来つて合点

たま み われ ねんぶつしやとう くほん

し給いしをうち見て、「さては、我らが念仏者等を九品の

じようど らいごう れんだい がっしやう いん むな き

浄土へ来迎の蓮台と合掌の印とは、虚しかりけり」と聞き

さだ

定めて、「さては、我われらも本土ほんどに還かえつて何かなにせん」とて、

はちまん

にまん

ぼさつ

い

かんのんぼん

しやば

八万・二万の菩薩のうちに入り、あるいは観音品に「娑婆

せかい

あそ

もう

ど

ほけきよう

ぎようじや

しゆご

世界に遊ぶ」と申して、「この土の法華經の行者を守護せ

懇

もう

にほんこく

ちか

いちえんぶだい

うち

ん」とねんごろに申せしかば、日本国より近き一閻浮提の内、

なんぼうふだらくせん

もう

しようしよ

しやかぶつ

たま

しゆくしよ

南方補陀落山と申す小所を、釈迦仏より給わつて宿所と

さだ

たも

定め給う。

あみだぶつ

そう

しんか

かんのん

せいし

す

さいほう

阿弥陀仏は左右の臣下たる観音・勢至に捨てられて西方

せかい

かえ

たま

せかい

とど

ほけきよう

ぎようじや

世界へは還り給わず、「この世界に留まつて法華經の行者

しゆご

せかい

うち

よつかいだいし

を守護せん」とありしかば、この世界の内、欲界第四の

とそつてん みろくぼさつ しよりよう うち しじゅうくいん いちいん たま

兜率天、弥勒菩薩の所領の内、四十九院の一院を給わつて、

あみだいん がく う

承

阿弥陀院と額を打つておわするところうけたまわれ。

うえ あみだきよう

ほとけ しやりほつ たい

ぼんぷ おうじよう

その上、阿弥陀経には、仏、舍利弗に対して凡夫の往生

様 と たま

しやりほつ しやりほつ

しやりほつ

すべきようを説き給う。「舍利弗、舍利弗」また「舍利弗、

しやりほつ

にじゅうよしよ

幾

きよう

呼

たま

舍利弗」と、二十余所までいくばくもなき経によび給いし

し し いつかん

は、かまびすしかりしことぞかし。しかれども、四紙一卷が

うち

しやりほつとう

しよしようもん

おうじよう

じようぶつ

ゆる

内、すべて舍利弗等の諸声聞の往生・成仏を許さず、

ほけきよう

きた

はじ

けこうによらい

こうみようによらい

き

法華経に来てこそ始めて華光如来・光明如来とは記せら

たま

いちえんぶだいいいち

だいちしや

しやりほつ

じようど

れ給いしか。一閻浮提第一の大智者たる舍利弗すら、浄土の

さんぶきよう

おうじよう

じようぶつ

あと

削

まつだい

ごよう

三部経にて往生・成仏の跡をけずる。まして末代の牛羊の

なんによ

かれがれ

きようぎよう

しようじ

はな

ごとくなる男女、彼々の経々にて生死を離れなんや。

よし

わきま

まつだい

かくしやとう

ほけきよう

この由を弁えざる末代の学者等、ならびに法華経を

しゆぎよう

しよしん

ひとびと

あみだきよう

よ

ねんぶつ

修行する初心の人々、かたじけなく阿弥陀経を読み念仏を

もう

ほけきよう

はな

なら

のち

よ

申して、あるいは法華経に鼻を並べ、あるいは後にこれを読

ほけきよう

かんじん

くどく

あみだきようとう

誂

んで法華経の肝心とし、功德を阿弥陀経等にあつらえて

さいほう

えこう

おうじよう

おも

たと

ひりゆう

ろば

の

西方へ回向し往生せんと思は、譬えば、飛竜が驢馬を乗

もの

しし

やかん

頼

にちりんしゆつげん

り物とし、師子が野干をたのみたるか。はたまた、日輪出現

のち

しゆしろう

ひかり

おおあめ

さか

とき

りようろ

ゆえ

の後の衆星の光、大雨の盛んなる時の小露なり。故に、

きようだいしい

びやくご

たま

あした

さんしや

もち

けぎよう

教大師云わく「白牛を賜う朝には、三車を用いず。家業を

う ゆう

なん

じよふん

もち

ゆえ

きよう

い

しょうじき

得る夕べには、何ぞ除糞を須いん。故に、経に云わく『正直

ほうべん

す

むじようどう

と

い

に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ』と。また云わく

ひい

ほしかく

たく

み

つたな

し

うんぬん

「日出でぬれば星隠れ、巧みを見て拙きを知る」云々。

ほけきようしゆつげん

のち

いこんとう

しよきよう

す

法華經出現の後は、已今当の諸經の捨てらるることは

もちろん

しゆぎよう

ほけきよう

しよじゆう

勿論なり。たとい修行すとも、法華經の所従にてこそあ

いま

にほんこく

ひとびと

どうしやく

いちにん

う

るべきに、今の日本国の人々、道綽が「いまだ一人も得る

ものあ

ぜんどう

せん

なか

ひと

な

えしん

おうじよう

者有らず」、善導が「千の中に一りも無し」、恵心が往生

ようしゆう

じよ

えいかん

じゆういん

ほうねん

しやへいかくほうとう

かた

しん

要集の序、永観が十因、法然が捨閑閣抛等を堅く信じて、

ほけきよう なげう いっこう ねんぶつ もう もの

あるいは法華經を抛って一向に念仏を申す者もあり、ある

ねんぶつ ほん たす ほけきよう たも もの

いは念仏を本として助けに法華經を持つ者もあり、あるい

みだねんぶつ ほけきよう はな なら そう ねん にぎよう

は弥陀念仏と法華經とを鼻を並べて左右に念じて二行と

ぎよう もの ねんぶつ ほけきよう いっぽう にみよう

行ずる者もあり、あるいは念仏と法華經とは一法の二名な

おも ぎよう もの

りと思つて行ずる者もあり。

みな きようしゆしやくそん おんやしき うち こ ししゆ

これらは、皆、教主釈尊の御屋敷の内に居して、師主を

さ お たてまつ あみだどう しゃかによらい べしよりよう うち

ば指し置き奉つて、阿弥陀堂を釈迦如来の御所領の内に

くに べう いえいえ なら た いちまんにまん

国ごとに郷ごとに家々ごとに並べ立て、あるいは一万二万、

しちまんべん いっしょう あいだいっこう しゆぎよう

あるいは七万返、あるいは一生の間一向に修行して、

しゅししん 忘

ふしぎ

しんぷ

主師親をわすれたるだに不思議なるに、あまつさえ、親父た

きようしゅしやくそん ごとんじよう ごとにゆうめつ りようじつ うば と

る教主釈尊の御誕生・御入滅の両日を奪い取つて、

じゅうごにち あみだぶつ ひ ようか やくしぶつ ひとううんぬん いちぶつ

十五日は阿弥陀仏の日、八日は薬師仏の日等云々。一仏

たんにゆう りようじつ とうざいにぶつ ししよう ひ

誕生の両日を、東西二仏の死生の日となせり。これあに

ふこう もの ぎやくろ しちぎやく もの ひと

不孝の者にあらずや、逆路・七逆の者にあらずや。人ごと

じゅうかあ ひと わ み とが 思

にこの重科有つて、しかも人ごとに我が身は科なしとおも

むざんむき いっせんだいにん

えり。無慙無愧の一闡提人なり。

ほけきよう だいに かん しゅ しん し みつ だいじ と たま

法華經の第二の卷に主と親と師との三つの大事を説き給

いっきよう かんじん きようもん い いま さんがい

えり。一經の肝心ぞかし。その經文に云わく「今この三界

は、みな皆これ我が有わなり。その中の衆生は、ことごとくこれ

わこいまところもろもろげんなんおほ

吾が子なり。しかるに今この処は、諸の患難多し。ただ

われいちにんよくどとううんぬんきようそむ

我一人のみ、能く救護をなす」等云々。またこの経に背く

ものもんいきようしようしんじゆ

者を文に説いて云わく「また教詔すといえども、信受せ

ないしひとみようじゆうあびごくいとううんぬん

ず乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」等云々。

ねんぶつしやほんしどうこうなかしゆじようほか

されば、念仏者が本師の導公は「その中の衆生」の外か。

われいちにんきようもんやぶせんなかひとな

「ただ我一人のみ」の経文を破つて、「千の中に一りも無し」

言ゆえげんしんおうにんななようりゆうのほみな

といいし故に、現身に狂人と成つて楊柳に登つて身を投げ、

かたつちおしじゆうよつかにじゆうしちにちじゆうよつか

堅土に落ちて死にかねて、十四日より二十七日まで十四日

あいだ てんどう おうし お

しんこんしゆう がんそ ぜんむい

が間、顛倒し狂死し畢わんぬ。また真言宗の元祖、善無畏

さんぞう こんごうちさんぞう ふくうさんぞうとう しんぷ か きようしゅ

三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等は、親父を兼ねたる教主

しやくそんほうおう た くだ だいにちたぶつ 崇 ゆえ ぜんむい

釈尊法王を立て下して大日他仏をあがめし故に、善無畏

さんぞう えんまおう 責 与 むけんじごく

三蔵は閻魔王のせめにあずかるのみならず、また無間地獄

お なんだち うたが がんぜん えんまどう え

に堕ちぬ。汝等このこと疑いあらば、眼前に閻魔堂の画を

み こんごうち ふくう 繁 書 ぜんしゆう

見よ。金剛智・不空のことはしげければかかず。また禅宗

さんがいしんぎようぜんじ ほけきようとう いちだいしろうぎよう べつきよう くだ

の三階信行禅師は法華経等の一代聖教をば別教と下す。

わ つく きよう ふきよう すうちよう ゆえ しえ だいじ

我が作れる経をば普経と崇重せし故に、四依の居士のご

とくなりしかども、法華経の持者の優婆夷にせめられて

ほけきよう じしゃ うばい 責

声 うしな げんしん だいじや

すうじゆうにん でし のく

こえを失い、現身に大蛇となり、数十人の弟子を呑み食らう。

いま にほんこく ひとびと

ほけきよう たも しやくそん しやくそん

今、日本国の人々は、たとい法華經を持ち釈尊を釈尊と

すうちよう たてまつ

しんごんしゆう ぜんしゆう ねんぶつしや 崇

崇重し奉るとも、真言宗・禅宗・念仏者をあがむるな

むけんじごく 免

さんしゆう

らば、無間地獄はまぬかれがたし。いかにいわんや、三宗

もの にちがつ

かつごう わ み ねんぶつ こと

の者どもを日月のごとく渴仰し、我が身にも念仏を事とせ

もの こころ

ひとびと ねんぶつ あみだきようとう ふぼ

ん者をや。心あらん人々は、念仏・阿弥陀經等をば、父母・

し くん しゆくせ かたき

忌 れい ぎやくしん

師・君の宿世の敵よりもいむべきものなり。例せば、逆臣

はた かんぺい さ

かんしよく さい ひ 忌

が旗をば官兵は指すことなし。寒食の祭には火をいむぞか

いにしえ ろんじ てんじんぼさつ しょうじようきよう した うえ

し。されば、古の論師・天親菩薩は小乗經を舌の上に

お お ちか けんじや きちぞうだいし ほけきよう よ たま

置かじと誓い、賢者たりし吉蔵大師は法華經をだに読み給

しょうじようきよう だいじようきよう はしつ

わず。これらは、もと小乗經をもつて大乘經を破失し、

ほけきよう てんだいだいし きぼう たてまつ ほうぼう じゅうざい

法華經をもつて天台大師を毀謗し奉りし謗法の重罪を

しょうめつ いま にほんこく ひとびと いちにん

消滅せんがためなり。今、日本国の人々は、一人もなく、

ふきようきようき くがん しょういとう いっこくばんにん みなむけん

不輕輕毀のごとく、苦岸・勝意等のごとく、一国万人、皆無間

じごく お ひとびと ほとけ ねはんぎよう しる まつぼう

地獄に墮つべき人々ぞかし。仏の涅槃經に記して「末法に

ほけきようひぼう もの だいちみじん 多 しる

は、法華經誹謗の者は大地微塵よりもおおかるべし」と記し

たま

給いし、これなり。

しかるに、今、法華經の行者出現せば、いま ほけきよう ぎようじゃしゆつげん 一国万人、皆、いつこくばんにん みな

ほけきよう どくじゆ や きちぞうだいし てんだいだいし したが

法華經の読誦を止めて吉藏大師の天台大師に随うがごと

み につきよう ふきようきようき かえ ふきようぼさつ しんぶく

く身を肉橋となし、不輕輕毀の還つて不輕菩薩に信伏

ずいじゆう つか いちにちふつか ひとつきふたつき いちねん

随従せしがごとく仕うるとも、一日二日、一月二月、一年

にねん いっしょう あいだ ほけきようひぼう じゆうざい めつ 難

二年、一生が間には法華經誹謗の重罪はなおし滅しがた

ぎ とうせい ひとびと ししゆ

かるべきに、その義はなくして、当世の人々は四衆ともに

いちまん 起 ねんぶつしや ほけきよう 捨 ねんぶつ

一慢をおこせり。いわゆる「念仏者は法華經をすてて念仏を

もう にちれん ほけきよう たも ねんぶつ たの われ

申す。日蓮は、法華經を持つといえども念仏を恃まず。我ら

ねんぶつ たも ほけきよう しん かい たも いっさい ぜん

は、念仏をも持ち法華經をも信ず。戒をも持ち一切の善を

ぎよう　とううんぬん　やと　あと　かく　きんちよう　かしら

行ず」等云々。これらは、野兎が跡を隠し、金鳥が頭を

あな　い　ろひと　こうし　悔　ぜんしろう　ほとけ　脅

穴に入れ、魯人が孔子をあなずり、善星が仏をおどせし

異　しか　うままよ

にことならず。鹿・馬迷いやすく、鷹・鳩変じがたきもの

なり。はかなし、はかなし。

とうじ　よ　いにしえもう　ようや　あ　ゆえ　しんちゆう

当時は予が古申せしことの漸く合うかの故に、心中

おも

には「いかんせん」とは思いうらめども、年来あまりに法にす

謗　あつく

ひるがえ

しん

ぎてそしり悪口せしことがたちまちに翻りがたくて信ず

よし

もうこ

強

むね

る由をせず。しかも、蒙古はつよりゆく。いかんせんと宗

もり　よしとも

歎

ひと

こころ

盛・義朝がようになげくなり。あわれ、人は心はあるべき

こうし きゆうしいちげん しゆうこうたん よく とき さんど 握

ものかな。孔子は九思一言、周公旦は浴する時は三度にぎ

しよく とき さんどは たも けんじん ようい

り、食する時は三度吐き給う。賢人はかくのごとく用意を

せけん ほう 法 怪

なすなり。世間の法にも「ほうにすぎばあやしめ」という

くに じ ひと ひと もう

ぞかし。国を治する人なんどが、人の申せばとて、委細に

たず そう とが おこな 悔

も尋ねずして左右なく科に行われしは、あわれくやしかる

か けつおう どうおう せ ごおう えつおう い 捕

らん、夏の桀王が湯王に責められ、呉王が越王に生けどり

とき けんじゃ かんぎよう もち く

にせられし時は、賢者の諫曉を用いざりしことを悔い、

あじやせおう あくそうみ い たこく おそ とき だいば め

阿闍世王が悪瘡身に出で他国に襲われし時は、提婆を眼に

み みみ き ちか ないしむねもり 戦 負 よしつね い

見じ耳に聞かじと誓い、乃至宗盛がいくさにまけ義経に生

かまくら

くだ

おもて

晒

とき

とうだいじ

や

けどられて鎌倉に下されて面をさらせし時は、東大寺を焼

はら

さんのう

みこし

いたてまつ

なげ

き払わせ山王の御輿を射奉りしことを歎きしなり。

いま

よ

いちぶん

違

にちれん

いや

しよそう

今の世もまた一分もたがうべからず。日蓮を賤しみ、諸僧

たつと

たも

ゆえ

じねん

ほけきよう

ごうてき

な

たも

を貴び給う故に、自然に法華經の強敵と成り給うことを

わきま

せいどう

そむ

おこな

ぼんしやく

にちがつ

弁えず。政道に背いて行わるるあいだ、梵釈・日月・

してん

りゆうおうとう

だいおんてき

な

たも

ほけきようしゆご

しゃか

四天・竜王等の大怨敵と成り給う。法華經守護の釈迦・

たほう

じつぼうふんじん

しよぶつ

じゆせんがい

しやつけたほう

にしようにてん

多宝・十方分身の諸仏、地涌千界、迹化他方、二聖二天、

じゆうらせつによ

きしもじん

たこく

けんおう

み

い

か

こくしゆ

十羅刹女・鬼子母神、他国の賢王の身に入り易わつて国主を

ばつ

くに

ぼう

し

まこと

てん

責

罰し国を亡ぜんとするを知らず。真の天のせめにてだにも

あるならば、たとい鉄圀山を日本国に引き回らし、須弥山を

おほ てつちせん にほんこく ひ めぐ しゅみせん

蓋いとして十方世界の四天王を集めて波際に立て並べて

防 じつぼうせかい してんのう あつ なみぎわ た なら

ふせがするとも、法華經の敵となり、教主釈尊より大事な

ぎようじや ほけきよう かたき きようしゅしやくそん だいじ

る行者を、法華經の第五の巻をもつて日蓮が頭を打ち、

じつかんと ひ ち さんざん ふ たいか げんとうにせ

十巻共に引き散らして散々に踏みたりし大禍は、現当二世に

脱 そちら にほんしゅご てんしやうだいじん

のがれがたくこそ候わんずらめ。日本守護の天照太神・

しようはちまんと くに 助 たも 急

正八幡等も、いかでか、かかる国をばたすけ給うべき。いそ

じばつ くわ みずか とが のが 励 たも

ぎいそぎ治罰を加えて自らの科を脱れんとこそはげみ給

遅 とが おこな にほんこく しよじん

うらめ。おそく科に行うあいだ、日本国の諸神ども

してんだいおう

戒

四天大王にいましめられてやあるらん。知り難きことなり。

きようだいしい

おも

ぼさつ くに たから

教大師云わく「ひそかに以んみれば、菩薩は国の宝なる

ほけきよう

の

だいじよう

りた

まかえん

せつ

みてん

こと法華経に載す。大乘の利他は摩訶衍の説なり。弥天の

しちなん

だいじようきよう

なに

のぞ

七難は、大乘経にあらずんば、何をもつてか除くとせん。

みねん

たいさい

ぼさつそう

みようめつ

未然の大災は、菩薩僧にあらずんば、あに冥滅すること

え

とううんぬん

いま

だいもうここく

じようぶく

くげ

得んや」等云々。しかるを、今、大蒙古国を調伏する公家・

ぶけ

につき

み

ごだいそん

しちぶつやくし

武家の日記を見るに、あるいは五大尊、あるいは七仏薬師、

ぶつげん

きんりんとううんぬん

しようぼう

たいさい

あるいは仏眼、あるいは金輪等云々。これらの小法は大災

け

かえ

ほんにん

つ

な

くに

を消すべしや。「還つて本人に著きなん」と成つて、国たち

まちに亡びなんとす。
ほろ

ひえ やしろ ほっけ ごま おこな

あるいは日吉の社にして法華の護摩を行うといえども、

ふくうさんどう あやま ほう もと おこな きとう ぎ

不空三蔵が誤れる法を本として行うあいだ、祈禱の儀に

いま こうそうとう とうじ しんこん

あらず。また今の高僧等は、あるいは東寺の真言、あるいは

てんだい しんこん とうじ こうぼうだいし てんだい じかく ちしよう

は天台の真言なり。東寺は弘法大師、天台は慈覚・智証な

さんにな かみ もう だいほうぼう ひとびと

り。この三人は上に申すがごとく大謗法の人々なり。それ

いげ しょうとう とうだいじ かいだん しょうじよう もの

より已外の諸僧等は、あるいは東大寺の戒壇の小乗の者

えいざん えんどんかい じかく ほうぼう ま か

なり。叡山の円頓戒は、また慈覚の謗法に曲げられぬ。彼の

えんかい しゃくもん だいかい いま とき き

円戒も、迹門の大戒なれば、今の時の機にあらず。かたが

かな

た叶うべきことにはあらず。

ただいま

こくど 破

只今、国土やぶれなん。

こうかい

後悔

先 立

ふびん

ふびん

かた

たま

せんまん

いち

か

さきにたたじ。不便、不便と語り給いしを、千万が一を書き

つ まい

そうろう

付けて参らせ候。

み

げせん

う

こころ

おろ

そうら

ただし、身も下賤に生まれ、心も愚かに候えば、この

どうり

うけたまわ

そうら

こくしゅ

おんもち

ことは道理かとは 承り候えども、国主も御用いなきか

ゆえ

かまくら

そうら

ふしん

おぼ

そうろう

の故に、鎌倉にてはいかんが候いけん、不審に覚え候。

かえ

がえ

ぐい

ぞん

そうろう

ほど

くに

だいじ

返す返すも愚意に存じ候は、これ程の国の大事をば、い

おんたず

りようど

ごかんき

おこな

かに御尋ねもなくして両度の御勘気には行われけるやら

き

解

たま

ひとびと

どうり

んと聞こしめしほどこかせ給わぬ人々の、あるいは道理とも、

ひがごと

おお

おほ

そうら

あるいは僻事とも仰せあるべきこととは覚え候わず。また、

み

あみだきよう

よ

そうら

おん

この身に阿弥陀経を読み候わぬも、しかしながら、御ため、

ふぼ

そうろう

りふじん

よ

よし

おお

また父母のためにて候。ただ理不尽に読むべき由を仰せ

こうむ

そうら

ときかさ

もう

そうろう

き

を蒙り候わば、その時重ねて申すべく候。いかにも聞こ

後

すいぎ

ひとびと

おお

しめさずしてうしろの推義をなさん人々の仰せをば、たと

み

したが

そうら

こころ

いつこう

もち

い身は随うように候えども、心は一向に用いまいらせ

そうろう

候まじ。

おそ

そうら

か

抓

知

そうろう

また恐れにて候えども、兼ねてつみしらせまいらせ候。

ごぼう

ひとり

おんこと

そうら

とき

この御房はただ一人おわします。もしやの御事の候わん時

ごこうかい そらら

せけん ひとびと もち

は、御後悔や候わんずらん。「世間の人々の用いねば」とは、

いったん 愚

かみ おんもち

とき たれびと もち

一旦のおろかのことなり。上の御用いあらん時は、誰人か用

とき

もち

なに

ひと しん

いざるべきや。その時はまた用いたりとも何かせん。人を信

ほう しん

じて法を信ぜず。

せけん ひとびと おも

そうろう

おや

こ

ぜ ひ

したが

また世間の人々の思つて候は、親には子は是非に随う

くんしん してい

げてん

わきま

べしと。君臣・師弟もかくのごとし。これらは、外典をも弁

ないてん

し

ひとびと

じやすい

げてん

こうきよう

し

えず内典をも知らぬ人々の邪推なり。外典の孝経には、子

ふ しんくんあらそ

だん

ないてん

おん

す

む い

父・臣君諍うべき段もあり。内典には「恩を棄てて無為に

い しんじつ

おん

ほう

もの

ほとけさだ

たま

しった

入るは、真実に恩を報ずる者なり」と仏定め給いぬ。悉達

たいし えんぶだいいち こうし

ちち おう いのち そむ

太子は閻浮第一の孝子なり。父の王の命を背いてこそ、

ふぼ いんどう たま ひかん しんぷ ちゅうおう かんぎよう むね

父母をば引導し給いしか。比干が親父・紂王を諫曉して胸

掘 けんじん な なか いや たも

をほられてこそ、賢人の名をば流せしか。賤しみ給うとも、

こぼうし かんぎよう もち たま げんとう おんなげ

小法師が諫曉を用い給わずば、現当の御歎きなるべし。こ

おや よ そうら あみだきよう そうら

れは親のために読みまいらせ候わぬ阿弥陀経にて候えば、

とうじ かな 覚 そうら きようきよう もう

いかにも当時は叶うべしとはおぼえ候わず。恐々、申し

あ そうろう

上げ候。

けんじさんねんろくがつ にち そうにちえい

建治三年六月 日 僧日永

しもやまのひようごころうどのごへんじ

下山兵庫五郎殿御返事

